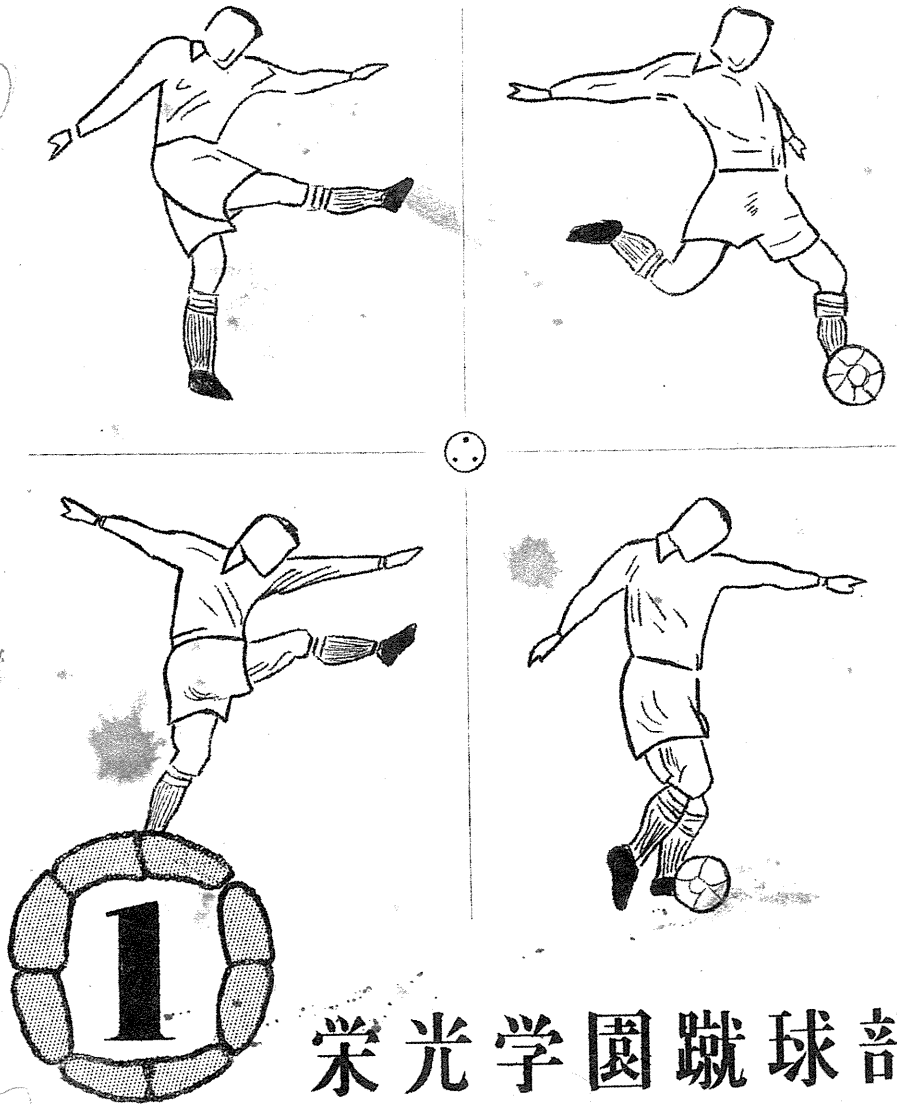
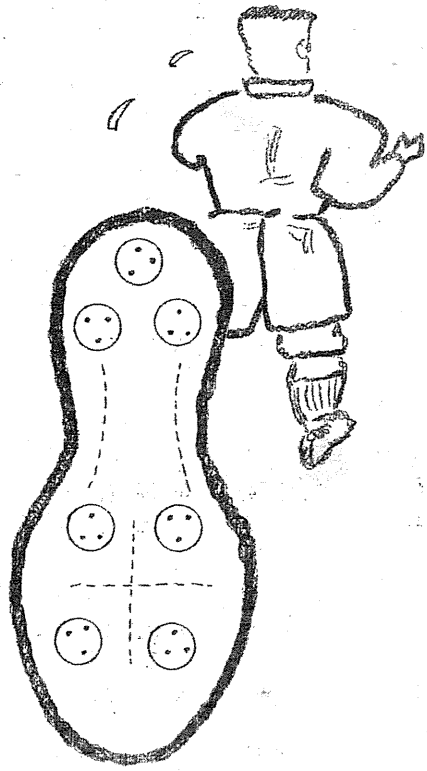
DASH



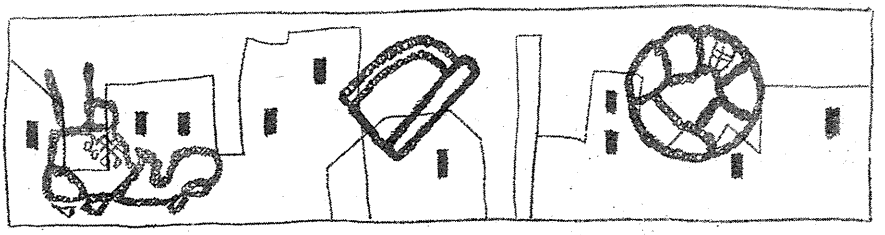
栄光学園蹴球部

Dash

—創刊号—



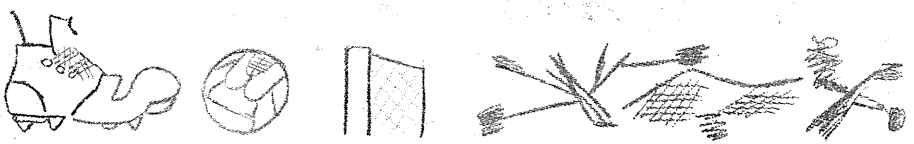
当小当田陸球部



目次

表紙　佐々木民雄

年頭に思う　部長　東郷電　1
今年一年を顧みて　主将　栗原正喜　3
草分け時代の蹴球部　四期生　泉頭篤二　5
全国大会成績報告　〈その1〉　父兄　金沢謹　9
県営グランドで　13
全国大会成績報告　〈その2〉　14
西ノ宮サッカー場にて　六期生　栗原正喜　17
新たなる出発を　三期生　穎原正美　19
大阪遠征日記　七期生　奥田斐規　22
六甲学院との交歓会　29
日記より　七期生　佐木民雄　31
今昔物語　五期生　川田暉雄　32
東日本大会の記録　七期生　小川弘　35
蹴球部に入って
▼九期生　田代和生　▼十期生　松田京司　▼市村俊一　▼林　茂　42
スパイク　九期生　田畑哲也　45
新人戦の椋子　46
中学校冬季大会成績　48
過去五年間の成績　50
昭和三十一年度の成績　53
◆主な行事　56
◆編集後記　55



年頭に思う

部長　東郷　寛

ぼくが部長になってからもう何回ぐらい試合を見ただろうか。調べてもあまり正確な数は出て来そうもない。でも、特に印象に残っている試合は、二十七年夏の対湘南高、二十九年春の対丫校戦、それに昨年夏の東日本大会の浜松西高との試合である。最初のは敗戦であったが、初めて自信と将来に対する希望を見出したのである。つぎのは遂に当時の県下Aクラスチームを接戦の末、打ち破った喜びである。第三の対浜松西は強豪という下馬評のあったチームを破り準決勝に進出、県外に栄光の名を輝かしたことである。

しかし、この最後の試合ではもう二つ忘れられないことがある。浜松西高のスポーツマンシップ、特に礼儀正しさである。こういうと何か大袈裟に聞えるかも知れないが、たゞ浜松の選手たちが試合の後「明日は頑張れよ」と我々を激励してくれたことにぼくはとても嬉しく思ったのだ。準決勝に出られるか否かという大切な日に一無名校に敗れ去った彼等の胸中如何に。たったこれだけの言葉ではあるが発するには難いものがあろう。ぼくたちが先生や友だちの応援も空しく敗けていたらどんな態度を取っただろうか。謙遜に想像してみよう。勝つことも難しい。しかし敗けて相手の勝利を心から祝うことはなお難しいのだ。敗けた時の苦しさ――きずつけられた誇り、自信の

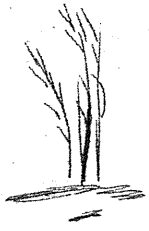
喪失、お互の不信――多くのチームは泣き出しそうな悲壮な面持ちで黙々と、あるいは、「おれたちは駄目なんだ」といった諦めと自嘲をもって去って行くのである。

スポーツはスポーツである。特に学校スポーツに於て余りにも勝敗を念頭におきすぎるのはよくない。問題は正々堂々、元気一杯、最善を盡したかどうかということにある。最善を盡したうえは勝者も敗者も全く同じである。徒らな優越感と卑屈は無意味である。勝者も敗者もお互に対手に対する尊敬を持たなければならない。

勝者は敗者への思いやりと激励を、敗者は相手の勝利に対して祝福を与えなければならない。試合の後に交わすあのエールの精神こそ、われらスポーツマンの精神でなければならない。

栄光の伝統の一つに礼儀正しさという徳がある。礼儀はどんなに感謝や尊敬や愛を心の中で抱いても、外部への表現がなければ礼儀とはいえない。今年はフェア・プレーということの上に、更に勝ったときも、敗けたときも明るい気持のよい雰囲気を皆に与えるように、個人としてはもちろん、チームとして心がけてゆこう。

先日、六甲学院を去るとき、武宮先生が「きれいに敗れることこそ大切」といわれたが、このようなことではないだろうか。この度、部の雑誌が発刊される運びとなったが、どうかこの本が勝つための技術のみの本とならず、立派な敗け方の研究にも場を与えるよう切に望むものである。



今年一年を顧みて

主将　栗原正喜

今年一年間を振り返ってみると、本当に素晴らしい一年間であった。夏季のリーグ戦には、一部進出は出来なかったが、東日本大会に初四位という輝かしい成績を納めることが出来た。又国体には不参加だった、けれど続いての全国大会の神奈川県予選では、翠嵐、小田原、茅ヶ崎、希望ヶ丘を連破して堂々優勝し、更に西関東代表決定戦では遠来の甲府商を6－2で降して大阪での全国大会にも出場できたのである。その他練習試合や親善試合にも立派な成績を残すことが出来た。今年神奈川県内のチームに敗れたのは、リーグ戦で希望ヶ丘に3－2で負けた試合のみである。あとは東日本大会の準決勝で遠野高（岩手）に抽選負けと同大会三位決定戦で教育大付に3－0で負け、そして全国大会で上野商工に5－1で負けた。その他に引分が二度で残りの二十四試合には勝っている。抽選負けを除くと二十四勝三敗で、勝率は八割八分にもなる。こうしてみると今年の栄光は抜群であったといってもよい。ではこの様な好成績を納め得た原因はというとやはりチームワークであったと思う。先輩から私達の中学時代にならった基礎をもとに皆がガッチリと和したことであり、又ファイトがあったことである。一例を上げれば、全国大会予選中に「大阪へ」というのは私達仲間の合言葉であった。大阪へ行くには一戦一戦全力を尽さんとみな必勝の意気に燃えていた。又前にもどって東日本大会の時には、全国

大会の時も同様であったが、夜遅くまで翌日の相手チームについて皆で真剣に研究した。いつもの年よりも二週間も合宿の期間が長かったのであるから、それだけいつもの年よりチームワークが良くなるに決っているだろう。

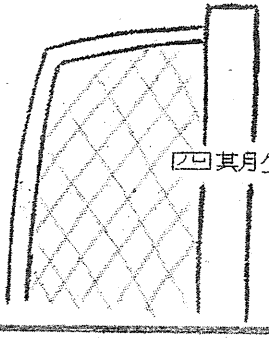
しかし一方このように部が大きくなったために、又遠征の回数も、距離も長くなったために、いろ〳〵と不備な点や、手のまわらなかった点も大いにあると思って反省している。部内の下級生に対しての指導を、とかく自分達の勝負が先に来てしまって、急りがちであったということもその一つであろう。今年は高校の練習に対して入れた程の力が下級生に対して入れられなかったことは確かである。

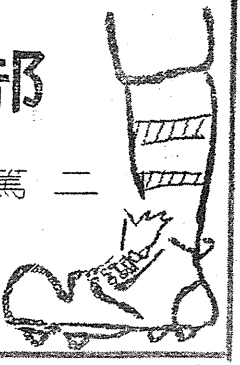
この様に自分達が自分達の試合を中心にしてばかりいて、下級生のことを気にしながらも仲々手のとどかなかった時に、毎週のように中学生の指導に来て下さった泉頭さんには非常に感謝している。私達よりも一層下級生の指導には秀でているのであるから、私達が指導したよりも多くの効果が上っていることは確かである。下級生の指導に仲々手がまわらなかったとはいえ今年の中学は無敗であり、十九連勝をしているのであるから、成績の面だけでは決して例年に劣っていない。

この一年間を振り返って、良くなったと思われる点、又、まずかったと思われる点は、大きくわけて、以上の二つであると思う。

草分け時代の蹴球部

四期生　泉頭篤二





創立後四年もたつと、部の様子も内外面共に随分変ってくるものだ。ゴムのボールをころころと蹴っては追っかけ廻し、洞窟を部室としていた草分け時代はもう、とおの昔に過ぎ去ってしまった。そして今は総勢八十人を越える大家族となり、数々の素晴しい成績をあげ、まさに隆盛の期にあるのだ。

○緑の牧場にて――○

僕が中三の時、三田君（現一橋大）に誘われて、ふら〳〵と入部したのが蹴球部だった。入部すると早速、ボールの蹴りっこが始まった。（プレイスキックなどという高級な練習方法などまだなかった。）

上級生らしいのが近寄ってきて

「君、何んていうの？」

「泉頭です。」

なんとその上級生らしき者がチャーシューだった。彼は中一の時から、すでに高校の試合に出場していたのだからまさにベテランだ。

当時のグランドは、タッチラインが山側にそって取ってあり、今のを九十度位回転させた位置にあった。ゴールというと、丸太棒を三本組んで釘で無雑作にぶっつけて出来ており、灰色のペンキが塗ってあった。後にバーは折れて、縄の時もあったし、ゴールもしまいには或る尻の大きい奴がプッシングの時へし折ってしまった。

春から夏にかけてグランド一面に、クローバーが繁茂して美しい白い花が咲くとハチがたくさんとんできてブン〳〵うなっていた。まあ、のどかな牧場でも想像する

といいかも知れぬ。

○赤い風船○

映画のタイトルではない。僕達の使用していたのは、まさに、フワフワの赤いゴムのボールだったのだ。それも二、三個しかなかったし、空気が満足に入っていないこともよくあった。そんなボールさえ、蹴り返せなかったのだから実力は推して知るべしだ。ボールがつま先に当って、びしんときたり、ヘッディング二十回なんていわれると、つくづく蹴球がいやになり、もうやめちゃおうか！と、思った事も少くなかった。中学生よ、笑わないでくれたまえ！

○青白い焔が……○

創立者であり、初代主将だったのが佐野碩さん（現商船大）だったが、この人は、創立の為に随分人知れぬ苦心をされたと思う。僕達は下級生だったから、なにも知らなかったが、こんな事をいっておられた。

「俺は校長の所へ何回もいってようやく部を創立する許可を得たが、次に校外試合となるとなかなか許してくれなかった。」

色白の厳しい顔立の小柄な佐野さんだったが、その闘志は、素晴らしいものだった。練習中又は試合中に、僕達を叱りとばす時、又はセンターハーフとして縦横に走りまわってアタックする時、何かきついものを感じたものだ。僕達は創立時代にあっては、たゞ、佐野さんを信頼する外はなかった。皆、佐野さんに引っぱられていたのだ。

蹴球部の骨組――小規模だが堅い――は、佐野さんによって築かれたと思う。創立の焔は、この青白い鋭い焔だった。

○みすぼらしいイレヴン

神宮へ……○

二十七年夏、一週間程練習して、東日本大会に出場することになった。僕は練習があまりつらいので、三田君と相談して、暑い日はサボル事をひそかに約束していたのだが、それが佐野さんに知れてしまった。サボッた翌日、

「暑い日はサボル事にしたそうだなあ！」とにらまれてしまった。試合はころに敗けてしまった。その試合の後の評を紹介しなければなるまい。

『ルールを覚えたばかりの栄光にしては善戦か……。』

然り！

ところで大会の入場式が神宮で行われたが、これがなんともみすぼらしかった。ストッキングだけは一応整えたけれど、ユニホームなど買う余裕がない。仕方なしに、海軍の囚人服みたいなものに、各自思い思いの襟をつけ、思い思いの背番号をつけ（大小・形はさまざま）、殆んどが運動靴をはくといった姿だった。中三の僕は、スパイクをはいていかめしく並んでいる両側のゴッイ高校生を見た時、驚き且つ恐れをなしてしまった。

○あの頭はヘッディングのために……○

額のすごく禿上った先生が、よく僕達の世話をして下さった。夏の練習の時氷水をヤカンに入れて持ってきて下さったり、暑いのに練習をよく見ていて下さったりで、練習をしている者にはとてもうれしかったのだが、この先生が後に部長になられた東郷先生だった。今も変らず部員の若さの行き過ぎにブレイキをかけたり、学校と部との関係を絶えず保たれたりで、我々の本当の縁の下の力持ちとして、心骨を砕いて、面倒を見て下さっている。僕達は卒業の時に後輩から送別会なるものをしてもらうのだが、部長にはいつまでたっても、何もしないのは考えなければならない問題であると思う。

○僕達はニコヨンだった○

創立の一時期が過ぎると須原さん（現早大）が主将になった。そして一風変った練習が開始された。

当時のグランドは雨が降ると、つるつるすべって、思うように練習が出来なかった。まずグランドを直そうというのが主将の考えだったらしい。そこで土木工事が始まった。練習前一、二時間、又は三十分交代という風に各々シャベルやツルハシをもって、土運び・溝の土揚げ、草抜きなどをやった。ぶうぶういいながら仕方なしにやっていたが、一時集団欠席をやったりして不満がだんだんつのってきた。とうとう二十八年の暮だったか、三期生と四期生が対立した。我々四期生の言い分は、

「僕達は蹴球をやりたいのだ。作業ばかりに時間を喰われ、本当の練習はちっとも充分ではないじゃないか！」

三期生曰く、

「主将に絶対服従せよ。」

しかし、一応腹中をぶちまけてしまえば、何かさっぱりするもんだ。簡単に解決してしまった。かえって部が相互の親しみを増してなごやかなものになったのだ。

部内の不満――特に下級生の上級生に対する不満は、長い間くすぶらせておくよりさっぱりと、全部ぶちまける方が、各々の為にも、部或いはチームの為にもいいのではないか。もみ消してもいっかえ、何かのきっかけで頭をもたげてくるものだ。

○豆タンク○

豆タンクとは昨年、大阪遠征の前の練習の時、往年の見事な突進をした穎原さんを見て高一のある者がつけたアダナだ。

創立の佐野さんから穎原さんにバトンが渡されるころ、部員もふえ、対外試合も勝てるようになってきた。佐野さんの築いた堅固な骨組に肉付けがなされていった。勿論、現在の部が県下に相当の実績をあげ、大阪にまで遠征出来るようになったのは、今の部員の偉大さに原因する所大であろうが、

君等の成功の根底には、今いった肉付けの跡がはっきりと残っているのだ。というのは、あんな少しの練習で、しかもコーチもなしに、あれだけの成果をあげるという事は常識では考えられない。

即ち、栄光という特殊性を考えなくては納得のいかぬことだ。そしてその特殊性の源、それが、豆タンタを代表とする三期生の肉付けの結果なのだ。その肉付けは時には土木工事のような形で強く出てきたかも知れない。しかしそこに特殊性の臭いがプンプンしている。そしてこれこそは保ちつづけなければならぬ。いたずらに他校の部の真似をしてもそれは不消化に終るし、返って部の崩壊にもなる。栄光の他校と違った特殊性をしっかりとつかんでその上でフルに活動することこれが大切だ

――終り――

神奈川県予選成績　（於県営）

第一回戦　シード

第二回戦　（十一月十八日）

栄光 4（2－0、2－0）0 翠嵐

この日は二回戦だが、栄光にとっては初戦なのでみな非常にはりきっている。グラウンドへきてみて驚いたことは東日本大会で四位になったことが相当評判になっていることである。他校の選手がこっちを見たり、指さしたりして、敬遠している。

この日の相手翠嵐などは、「今日勝てば！」というので、ブラスバンドを連れてきて大きな校旗をグラウンドのまん中にたててものすごい応援である。何だかまるっきり圧倒された感があった。

この日は、大体晴でコンディションは良好であった。双方ともファイトがあって、ピチピチとした試合であったが、栄光のチームワークよく、着々と点を重ねて快勝した。順調なすべり出しであった。

第三回戦（十一月二十三日）

栄光 4（2－2、2－1）3 小田原

小田高といえば一部のうちでも強いチームの一つで、はじめから苦戦が予想されたが、案の定、物すごい接戦となった。キックオフ早々先取点をとられたが、かえってファイトをもやし、すぐに一点返して同点とした。追いつ追われつのシーソーゲームで前半を2－2のタイスコアで終了した。

後半は栄光次第に調子を出して3－3の同点から見事な球さばきで決勝点をあげた。後はハーフ、

バックス共に堅く守り抜いてついに宿敵小田原を倒した。

この日はチームワークもよかったが、何といってもねばり強いファイトがものをいったのだろう。

準決勝（十一月二十四日）

栄光 3（2－0、1－0）0 茅ヶ崎

土曜なので急いで昼食をとってタクシーで県営グランドまですっとばした。三十分ほど休んでキックオフ。この日は前日の苦戦にくらべて楽な試合で、快勝した。

ついに決勝に残ったわけで、皆の顔はうれしさと希望にみなぎっていた。こうした喜びの中にも、「明日の決勝には是が非でも勝とう」という決意があらわれていた。

神奈川県決勝（十一月二十五日）

栄光 6（1－0、2－0、0－1、3－1）3 希望ヶ丘

決勝の日は空はどんよりと曇って、猛烈に寒い。洋服をきていてもこんな寒いのだから、選手達は大変であることはいうまでもない。しかし応援の方は今までで一番多いくらい。

さていよ／＼試合がはじまった。キックオフ早々栄光は巧みなパスで2点を先取し、好調なすべり出しをみせた。前半を3－1とリードしたが、希望ヶ丘には春のリーグ戦でもしてやられているし、体力も相当上に思われるので油断はならない。

後半は安心感からか、体力の差からか、乱戦となりついに3－3の同点で延長に持ち込まれた。こうなってはもう〃ファイト〃だけだ。送手一同最後のファイトをふりしぼって猛烈な攻撃を見せた。バックスも堅い守備で相手の得点をさえぎった。このようなファイトがものを言って遂に三点という大差をもって栄えの神奈川県優勝をなしとげたのである。この寒い日に九十分も走りまわるのはつらいが、〃優勝〃と決まってこの寒さもふとんでしまった。

西関東代表決定戦

（十二月二日於県営グランド）

栄光 6（2－2、4－0）2 甲府商高

このグランドへ通うことこれで五たび。例の坂をのぼって十二時ちょっと前グランドについた。グ

ランドについてみて非常におどろいた。というのは〝甲府商業高等学校〟と鮮やかに染めぬいた、大きな旗の下で、先生はじめ父兄など総勢五〇人ぐらいが、応援団長の声にあわせて、太鼓をならし、拍手する歌をうたうといった応援で気勢をあげているからである。これに対して栄光も拍手と声援で、対抗したが、やはり圧倒されそうである。

こうした猛烈な応援戦のうちに一時キックオク。前半はまったく互角で一点入れられゝば二、三分とたゝないうちに一点返すというシーソーゲームとなり2－2のまゝハ！フタイム。

後半は、栄光独自の柔軟な動きをみせ、甲府商陣をひっかきまわし4－0と大きくひきはなして、晴れの西関東代表が決定したのである。

試合後すぐ表彰式が行われ、夢にまでみた優勝旗を勝ち得た。まさに感激の一瞬であった。このあと新聞社の人に写真をとってもらい〝校歌〟をうたって解散した。

優勝旗には前々年からの優勝高の名の入ったきれがさげてあるがこゝに〝昭和三十一年度西関東代表栄光学園高等学校〟というのが下がるのだと思うと、うれしさに笑いがとまらないほどである。帰りの道でも、通行人から注目をあびて、恥しい気もしたが何ともいえないいい気持がした。

参考までにつぎに翌日の新聞の評をかゝげておく。

（評）甲府商は小粒ながらキビキビした動きでキックなども一日の長があるようにみえたが、一挙につつこもうという単純な戦法が栄光学園の柔軟な守備にひっかかって功を奏さなかった。CFの出色の巧技でリードすると、焦りを押えるだけの戦術体係のない甲府は乱戦模様となり大量得点をゆるすことになった。栄光は全員自己のペースを信じて敢闘し、最高のでき栄えを示したハーフと両インナーのいわゆるキーメンの努力は光っていた。

メンバー

GK	原	喜
RB	板	民
LB	栗	木
RH	渡名	塚
CH	矢	原
LH	佐々	郷
RW	篠	木裕
RI	石	村
CF	東	島
LI	佐	駒
RW	中	田
	細	生
	岩	

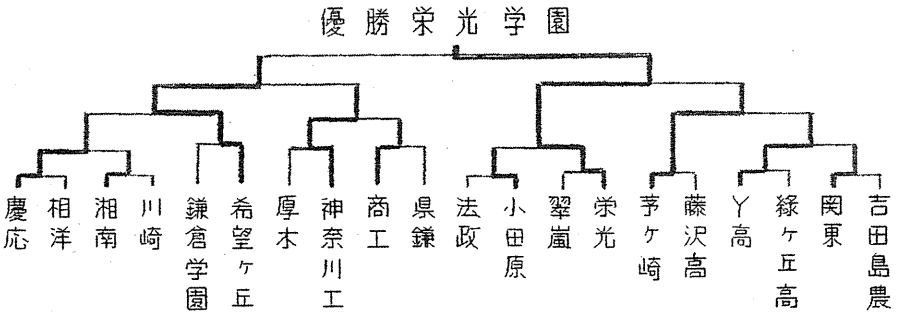
栗原主将が優勝旗をしっかりと受けとった。あゝこれで大阪に行けるんだと思うと胸がわくわくする。帰りに藤沢駅前の食堂に入り優勝旗を真中にサイダーで乾杯をした。

対甲府商スコア		
栄光	甲府商	
3	CK	8
7	FK	4
5	GK	4
0	PK	0
9	Shot	5
6	Goal	2

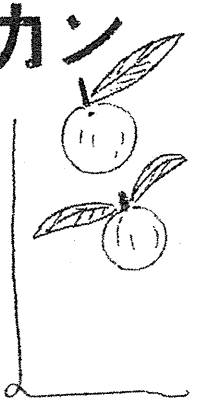
Goal in

(1)前 14分岩田
(2)〃 29分中村
(3)後 2分東郷
(4)〃 4分佐々木
(5)〃 12分中村
(6)〃 20分中村

神奈川県予選組み合せ



ミカン



対甲府商の決勝戦の時のことだ。栄光を応援して下さった湘南高校の岩淵先生、6－2と大差で栄光が勝ち西関東代表に決定すると、我がことのように喜んでおられたが、帰りがけに「オメデトウ」と声をかけ、オーバーのポケットからミカンを二つ出して石原さんに握らせる。

皆一つサブつ分けてもらって、「岩淵さんのミカンだ」と、うやうやしく口に入れる。

県営グランドで

金沢　謹

今から三十年程前に東京大学の学生であった人々の中には、サッカーファンが非常に多い。当時の東大サッカーチームは、ずばぬけて強かった。シーズンになると、省線信濃町の駅から神宮競技場まで続々として東大生が続いていくのであった。

緑一色のグランドに、純白のユニホームにライトブルーのストッキングのイレヴンがとび出してくると、スタンド席や芝生席の大部分から、期せずして拍手がなりひびいた。そしてキックオフからタイムアップまでの約一時間半というものは、グランドにくりひろげられる『我等イレヴン』かず〳〵の美技に魅了されたものである。

こうした東大の黄金時代は六、七年もつゞいたであろうか。野球にまけ、ラグビーにまける憂うつを、サッカーの〝この一戦に吹き飛ばし、胸をふくらまし帰ったものであった。

暮の十二月二日、栄光対甲商の、サッカー試合をみるために、小学四年の三男をつれて、県営グランドまでの、あの長い坂を昇りながら、私は、あの頃、鈴木とかいう東大のライトウイングが、百米を十一秒をきるという快速をとばし、サイドラインをすれ〳〵にコーナーまでつっこみ、鮮やかなセンターリングを、しばしばみせてくれたことなどを思い起していた。

さて、県営グランドについてみると、甲商側は幟、太鼓御持参の統制良しきを得た応援ぶりである。

栄光軍の華奢に見える体躯にくらべ、甲商軍は何れもダッシュのきそうな猛者揃いのように見える。『これは危いぞ。』と予感がする。

しかし、予感ははずれた。後半開始直後レフトハーフからライトウイングに流れるような見事なパスで一点をリードするころには追いすがる甲商軍もようやく疲れとあせりを見せ、太鼓の音も心なしか弱まってきた。相手の応援団の意気ごみに気押されたように見えた栄光側に生気があふれだした。「静かなる」応援は、遂に勝利の栄光の前に感嘆となって爆発した。その瞬間、私自身、三十年前の東大学生であった頃のあの「胸ふくらむ」思いを久し振りに満喫していたのであった。

（七期生、金沢洋君のお父さん）

全国高校サッカー選手権大会成績

★全国大会成績★

高体連からの参加賞

②

全国大会成績　一回戦不戦勝

第二回戦（一月三日於西宮球場）

上野商工　5（2－1、3－0）1　栄光（西関東）
（三岐）

いよいよ晴れの全国大会での初試合の日が来た。前の晩には好き焼をたらふく食ってぐっすり寝た。七時半起床。前日の雨もはれて今日は絶好の蹴球日和、「これならいけるぞ！」とみなはりきっている。調子はよい様だ。

九時半ごろ出発して西宮球場へ向かった。西宮北口駅をおりると選手達が続々と球場へ行く。その中には今日の相手、上野商工の面々も見られる。選手達は球場の控室へ行く。わが栄光応援団――といってもわずか二〇人程度だが――は正面に陣どって、校旗をなびかせた。

十時四十五分、第一試合の藤枝東対富山中部が終って、栄光と上野商工のイレヴンがベンチからとび出してきた。まもなく、「向かって右側のグリーンのユニホームが西関東代表栄光学園、左が三岐代表上野商工であります。たゞ今よりメンバーを発表します。」とアナウンスがある。両軍とも左右のゴールでウォーミングアップを行っている。上野は作日の対美唄工同様非常によいキックをするし、フォーワードも鋭いダッシュを見せる。油断のならない相手である。これに対して栄光も、いつもの通り軽い練習を行った。グランドコンディションは昨日の雨でやゝ不良。特にゴール前は相当のぬかるみである。

十二時。いよいよキックオフ。前半、最初は相手の鋭い出足に、栄光の守備陣乱れて押され気味。ついに七分先取点を奪われた。このあと栄光立直るかと思われたが、グランドの悪コンディションに、フォワードやゝみだれ、バックスも足をとられて二〇分二点目をゆるした。しかしこのあと、栄光は

やゝ調子をとり戻し、二十五分L W岩田からのパスをCF中村がひつかけてRW東郷にパス、東郷これをよくキープして押し込み最初の一点をあげる。このあとは栄光全く調子をとり戻した感で、六分四分に試合をはこび2－1のまゝ後半へ持ち込んだ。

ハーフタイム、栄光は右側ゴール横に集まって作戦をねる。OBの頼原さんからも、「このまゝいけばまだ点は入るからみんながんばってくれ」と激励され後半に臨んだ。

後半に上野は昨日と同様に調子をおとすのではないかと予想されたが、いっこうにおとろえる様子はない。これに対して栄光は前半の最後の好調は忘れたかのように再び押され気味となる。栄光側応援団、「いつ調子をとりもどすか。」とはら／＼しているうちに九分三点目をしてやられた。なにしろ向こうのキックの良い事といったらものすごく、ゴールキックなどはハーフラインをかるく越してこちらのゴール前までころがってくる三点目を入れられてからはガクンときて栄光ファイトも出尽した感。二十九分、三十四分と連続点を許していっに、わが栄光は5－1という大差をもって敗れてしまったのである。残念だ。あまりにも残念であった。

（評）実力の差というより仕方がない。何といってもキックのわるいことと強引さ、即ち鋭いダッシュの足りなかったことが敗因である。この試合によって、おとなしいチームワークだけではだめであることが、まざ／＼と感じさせられた。巧みなコンビでボールを持って行っても、ひとたびとられればいっぺんにゴール前へ蹴り返されてしまう。栄光が蹴り出した球は相手にとっては蹴り出したうちには入らないのである。敵はそれを鋭いダッシュによって捕え、前へ蹴り出す。フォワードはそれを再びダッシュしてとり、これまた強いキックでシュートする。

このような中ではいかに栄光独自のチームワークといえども、くずされるわけである。これは、過去このような大型チームと顔のあわなかった事にもよる。神奈川県にはこのような大型チームはちょっと見あたらない。だから適当に強いチームを送んで練習試合をしてみることも、こういう面からみて

必要なことであった。

我々は全国大会にきてかくも貴重な体験を得たのである。即ち「強いキック」と「鋭いダッシュ」この点こそ今年の研究すべき重大な問題であると思う。

▽参考までに一月四日の大阪の毎日新聞の評をあげておこう。

（評）上野は前半七分LW藪井が栄光ゴール前ポスト左柱近くのこぼれ球を拾って先取点をあげた。チームワークのよい栄光も初出場だけにこの先取点に戸惑いを感じ、以後攻守共にやゝもたつみずから激しい上野の攻勢を誘っていた。上野は二十分RW田畑の中央への好パスをCF川中が体ごと押し込んで2－0と優位に立った。栄光はこのあと二十五分LW岩田から得点機をつかみ、CF中村さらに球は左から右へたくみに転送され、最後にRW東郷が上野のGK富永をたくみに前へ引出して得点、一度は2－1とせまったしかし、上野は、自信に満ちた攻勢を示し、後半九分RI清水、二十九分LI谷中、三十四分CF川中が連続三点を加え完勝した。

▽**メンバー及び トータル**

	栄光	上野
GK	栗原	富永
FB	渡喜	岩木
	矢板	克木
HB	佐民	井
	篠塚	関
	石原	外
FW	東郷	畑
	佐裕	水
	中村	中
	生駒	中
	岩田	井
	16	5
	5	9
	6	6
GK		1
CK		0
FK		0

金沢記

青春

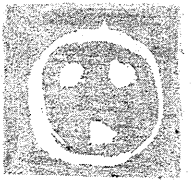
碧空は　すみわたり
風車は　無心にまわる

よき麦より　よき粉をつくり
あしき麦より　あしきをつくり
風車は無心にまわる

豊かな生産か　貧しい浪費か
小麦をそゝぐ　人にまかせて
風車は無心に　まわる

風車小舎を仰げば
人生の青春も　かくの如きかと
ひとり憶う

（声より）



西宮サッカー場にて

栗原正喜

栄光の蹴球部が今後更に発展する為にはどうしたらよいだろうか。そんなことを西宮のサッカー場で沢山の観衆の中に混って、他校の試合の巧技の連続を見ながらちょっと考えてみた。

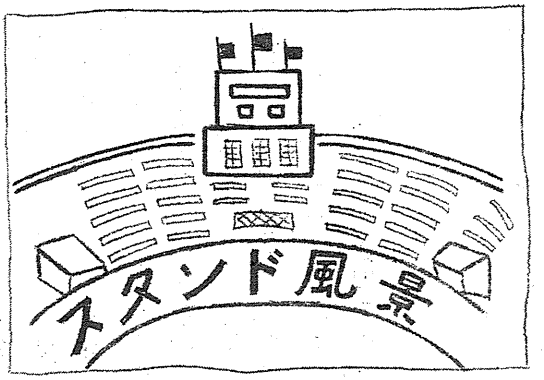
まず栄光では一週二回しか練習が出来ない。このわずかな練習量で他校の連日の猛練習に対抗するには各自がその二日の練習日を大切にすることが第一である。蹴球のような団体スポーツでは一人抜けただけでもうまともな練習が出来なくなってしまう。そしてまたこのわずかな時間を有効に、規則正しく、使うことも大切である。例えば土曜以外の日には、特に個人技中心にして、土曜日に総合的練習を、行うといった方法である。一日の練習で二日ないし三日分位の効果を上るようにするのである。そうすれば、週二日の練習でも充分他校についていける。

しかし体力の点に於てはそのようなことが出来ない。今年は休み中にそして土曜日に主に体力をつけるようにして木曜日は技を中心にして練習した。連日猛練習をしている他校に較べて劣るのは当然であろう。今のところこの体力を他校と同程度までもっていくのは不可能であるが、他の要素によってそれを補うことが出来る。というのはチームワークを完全にすることと人一倍ファイトをもやすことである。そしていわゆる「栄光のペース」を身につけることである。けれども全国大会を見てこれではやはり完全にカバーすることは出来ない、まだ何か足りないということをはっきりと感じた。

その他に皆で話合う機会を出来るだけ多くもつことも非常に有意義だと思う。

以上のことをもとに我が蹴球部の向上に努め、この大会での貴重な体験を決して無駄にしまいと心に誓った。

（日も暮れはじめ、冷い風の吹いているスタンドにて）



関西弁で「良い子」のことを、「エエコ」という。

スタンドで僕等の後にすわっているオッサン、ツマアルコールがまわっているのか、大きな声で

「ミドリの方はナンチュウネン。ハァエエコオか。ハハハ……

〃エエコヤナア、エエコヤナア。」

これを聞いて、応援に来てくれた先輩の泉頭さんや、川喜田さんも「エエコ、エエコ」

例のオッサン、上野を盛んに応援していたがその上野が二点とってリードするとますく御気げん。

栄光が一寸でも押し返すと

「ヘッ、アイキョ、アイキョ。」

聞いていた泉頭さん達も又まねをして

「アイキョ、アイキョ。」

そのうちに栄光が一点返すと、泉頭さんだったか、川喜田さんだったか曰く、

「あゝ、今のは大きなアイキョだったなあ。」

上野攻め続けて再三シュートするも惜しいところではずれる。上野商の応援に来た生徒が、「惜しいのが三本もあったさかいに、合わせれば一点になるぞ。」どこでも云うことは同じだと思った。

正月の休みで大阪の方に来ていらっしゃった金子先生も応援に来て下さった。後半、あと時間は五分たらず得点は5－1とリードされている、もうだめだとだれもが思った。

「栄光最後までガンバレヨオー。」

金子先生である。大きな声だ。あとで六甲に帰ってから試合にでたものが皆いっていた。

「金子先生の声デッカイナア。」

新たなる出発を……

三期生　　穎原正美

◆—今度栄光学園の蹴球部が、全国大会へ出場したのを記念して—◆
◆—て、この雑誌が出ることになったそうだが、誠によい思い—◆
◆—つきだと思う。その原稿を頼まれて文章の下手な僕は、全—◆
◆—く困ったが、思いつくまゝにかいてみた。—◆

蹴球部が出来たのは今から五年前であり、その当時から較べると格段の差がある。その頃はそもそも全国大会に出場しようなどという大それた考えを持つものもなく、又出場出来るようなチームでもなかった。部員が十四、五人、ボールが一つか二つ、ネットなし、という状態だから話にならない。しかし初代主将佐野さんの後、僕、三田君、泉頭君、川喜田君、栗原君とバトンが次がれ、少しづつではあったが着実に発展してきた。

その間、安保さんや加納さんにコーチに来てもらったこともあったが、ほとんどが自己流のまゝでこゝまで成長したといってよいだろう。本で読んだことをとり入れたり、試合での経験を生かしたりして、技術とチームワークの向上を目指した。その結果西関東地区で優勝という好成績を収め得たわけだ。

何をおいても、一応優勝するということは難しいことだ。特に蹴球などは運ということはそれ程でなく、実力がものをいうのであるからだ。

五年間も一緒に部で活動したのであるからこれ以上のチームワークは望めない程であり、五年間も球を扱っていれば、一応の処理は出来るというものの、実際口でいう程うまく事が運ぶ筈はなく、部はある時には円満にまとまっていても、ある時には抵抗があり、分裂寸前にまでなることさえあるし、又練習も週二回でコーチャーがいないとなればそれ程効果的には出来ない。この様な悪條件をのり

越えて優勝したということは確かに賞讃すべきだ。これまでの努力に対して拍手を惜まない。君達にとって、この優勝こそ今までの部生活に於ける最大の喜びであったにちがいない。それは同時に先輩の喜びであり、更にまた蹴球部という枠を越えて、栄光全体の喜びでさえもあるのだ。

あの球場で（県営グランド、対甲府商の決勝戦の時）君達をまえにして声高らかに校歌を歌っているとき、僕は強くこのことを感じたのである。

さて、ここまで話はうまく運んだが、この先は例のごとく〝ケチ〟をつけて君達の御気嫌を損ねたいと思っているから、お気に召さない方は読むのを止めて、本をとじることをおすゝめする。

というのは西宮での試合の成績は、手ばなしで優勝を喜んでいるにはあまりにも貧弱すぎた。ここでは実力の差がはっきり表われていた。西関東の雄も全国大会では全く問題にされない存在であった。このことは栄光チームが眞に実力を備えた優勝チームでなかったということを示しているのではなかろうか。

この意味で栄光の優勝は少々早すぎたと思う。実際、今度の全国大会でそのことを目の前につきつけられたのだ。

東日本大会で注意されたのも、走力と蹴ることだったし、今度の大会での敗因も根本的には蹴れないことが大きくひゞいている。このことはいかに基本的練習が必要なことであるかを充分に物語っている。弱いチームに対しては細かいパスや技巧に頼って試合を進めることが出来ても、強いチームには全然通用しないということをたたき込まれたのだ。栄光は基本を修得した上でのパス戦法ではなかった。表面的技巧に頼りすぎたのだ。従って今までに収めた好成績にくらべて、いかにもかよわい感じがするのも、又中学生の試合を見ているようだと皮肉られるのも無理もない。

これを読んで憤慨する人もあろうが、もう少しだから終りまで読んでもらいたい。この弥なチームの責任というものは、優勝が軍なるチームだけの努力によって得られたのではないのと同様に、これ迄の部に関係した人々にかゝていることも事実である。週二回だけ

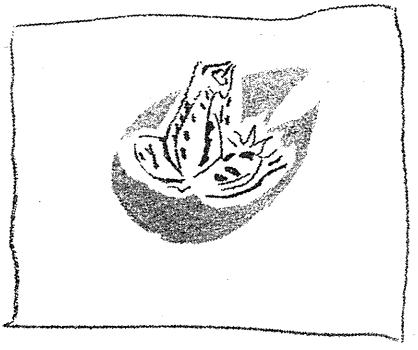
の練習ということも大きくひびくだろう。勉学と両立させるというむつかしい問題もある。

更に又神奈川県のレベルが低いということもその原因だ。しかしだからといって、現在の状態のまゝではおくことは絶対にいけない。それは蹴球部の死を意味する。もう一度こゝで蹴球部をやり直すのだ、最初から。底力のある、チームを作るのだ。

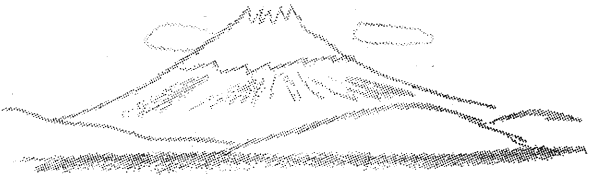
それは非常に困難なことだが不可能ではない。今まででも、少くとも他のチームよりは効果的に練習をしていたが、更に工夫して努力しよう。最初の二、三年は好成績をあげることは出来ないかもしれない。しかし蹴球部の発展を長い目で見るならば、このことは、全く問題にならない。目先だけの好成績を追うのはどこかの国の大臣にまかせておけばよい。百年の計などと大げさなことをいわなくとも、せめて三、四年の計画位は立ててよいだろう。

今大会出場で、蹴球部の盲目的な創生期は終ったとみてよいだろう。この辺で功をあせらず、じっくり部の発展を見つめることが大切だと思う。大会に参加したものは勿論、先輩達も二度とこの苦杯をなめないように、これからの後輩の指導のために大いに反省してもらわねばならない。これによって今後栄光がよりガッチリしたチームとなるならば、正月をつぶして高いお金を使って大阪へ行ったということも、まんざら無意味なことでもあるまい。

創立五年にして、大海を知った神奈川の蛙の子は幸いなりというべきかな！



征日記



（生活記録）

奥田斐規

念願かなって初の全国大会出場が決り、学期末の資金集め、冬休みの練習を終って幸いにも、高校部員二十

第一日　一月一日(火)

八時半全員横浜駅に集合。いつもスローモーと定評のある人でさえ今日ばかりはチャンときている、こんなときの四十分は早いものでやがて九時十五分、父兄、先輩、中二、中三の部員等の方々に見送られ、僕等の乗った特急サクラは静かに横浜を出る。

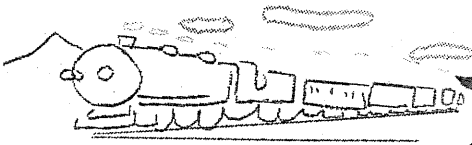
特急だからゆう〳〵とまで、いかなくとも、ともかく必ず席はとれると思っていたが、とんでもない、高二の方はそうでもなかったらしいが高一の方の八号車には空席皆無。高一、七人ずらりとふくれっつらして立っている。

しばらくするとボーイが来たので、篠塚君から始って七人でゾウ〳〵いうと、方々さがして空席を見つけてはくれたが、てんでんばら〳〵。切符に指定された八号車にすわったのはたった一人、あとは七号車に二人、九号車に三人、十号車に一人。皆一人でぶすっとすわっている。沼津駅でボケサンから弁当が配られる。思い〳〵にこれを食べ終ると、そろ〳〵車内を歩きまわって「おれのまわり三人名古屋で降るから来いよ」等と連絡をとりはじめる

名古屋を過ぎると行くてには雪の山々が見え、汽車はだんだんそれに近ずいてゆく。

右手に琵琶湖が見えてきた。対岸はかすんでいて見えない。芦ノ湖なんかとは大分ちがうなあと思った。

京都まで来ると席もがらすきになるし、それにすわっていても七時間もするとそうとう疲れてくる



遠足大阪

（六甲での

七期生

人が大阪でこの正月を過すことが出来た。ここに我々の大阪での楽しかった六日間の生活を描いてみようと思う。

ものの、皆大分行儀が悪くなる。

予定より六分遅れて十六時二十六分大阪駅に到着する。

出迎へに来てくれた六甲の蹴球部員に案内され、神戸行きのプラットホームに渡る。丁度神戸行きが停っているがひどくこんでいる。六甲の人がいう。

「あないにこんどるやつじゃ、しんどいでっしゃろ」

あゝこゝは大阪だった。

大阪から二十分程の六甲道で電車を降りる。穎原さん、南木先生が迎えて下さった。そしてお迎えのジープに乗せてもらって（但し荷物だけ）宿泊所六甲学院に向う。急な坂をのぼること三十分やっとたどりつく。

中三Aが食堂、同Bが寝室になっている。寝室に荷物を置くと食堂のいすに皆すわり込んでしまった。先生方の紹介があって七時半すぎ食事となる。その前に校長先生から「体の調子が悪るかったらすぐに申し出なさい。そして三日の試合には頑張って下さい」とのお言葉がある。

おかずは魚のフライが二枚、キャベツ、スープ。

食事後、先に来て今日の会議に出てくれた穎原さんから会議でのいろいろなことを聞き、明日の予定を組んで、皆疲れているので早めに床についた。ストーブをがんがんたいているので寒くはない。十分とたたぬうちに方々からスースーと寝息が聞えてきた。

第二日　一月二日(水)《入場式》

昨夜早く寝たにもかゝわらず、前

日の汽車の旅でよほど疲れたと見え三十分も寝坊してしまう。大あわてでともかく選手だけは八時三十分出かける。残りのものであとかたずけをして弁当のサンドイッチをもって後を追い西宮球場に向う。あいにく雨が降り出したので入場式の行進は行われずスタンドに選手が整列し式が始る。暗いスタンドに栄光のはでなグリーンのユニホームが目立つ。

優勝旗、高松宮杯返還、各方面からの挨拶、余り堂々としてない選手宣誓等あって十時半式は終る。明日の我々の相手を決める上野商工高対美唄高の試合が十二時よりあるのでそれを見る為サンドイッチを食べて待つ。

雨天にもかゝわらずかさをもって観戦する人が少くない。一時半2－1で上野が勝ち明日の相手が決った。あれなら勝てると自信満々で球場から出る。

六甲につくとすぐ練習開始。皆調子は悪くない。五時過ぎ明日必勝を期して〃フレッ、フレッ、エイコー、オウッ、オウッ〃

夕食は豪華だ。スキヤキである。五人に一つのナベで各班思い思いに始める。一人当り百匁位の肉でタップリ栄養をとる。一時間程でようやく食べ終る。ウーン動けない。笑わすなよ苦しいから！！。

一休みして明日の作戦会議を開く。「今日見たところでは明日の相手は勝てない相手ではないな。」と顕原さんのことばをかわきりに皆しんけんに語り合う。

一時間半程語り合い、タップリ栄養もとったからグッスリ寝て明日は必ず勝とうと誓って床につく

第三日　一月三日(水)〈試合〉

いよいよ今日は試合だ。目がさめると前日の雨もどこへやらいい天気だ。「これなら勝てるぞ！」

八時十五分頃、ナマタマゴとミソシルで朝食をすませる。

九時選手出発、残りのものは昨日の通り弁当、菓子をもらい十時出発。行きの電車で今日の相手上野高と一緒になる。彼等は六甲の旅館にとまっているらしい。三点入れれば勝てるなんていってる。

優勝候補の藤枝東と富山のと試合がすむと十二時三分上野のキックオフで試合開始。応援は永島、三田、泉頭、浅羽、川喜田、綱島の六先輩それにはるばる応援にかけつけてくれた高二の人二人、そ

して六甲の生徒先生。

奮闘七十分、試合は終った。5－1しようがない。出来るだけのことはしたんだ。

三ノ宮に泊っている泉頭さん等も球場からそのまゝ六甲へ遊びにきた。あの急な坂をふう〳〵いってのぼってきた。なにしろすごい坂だ、タクシー頼んでもことわられる程だから想像がつくと思う。

涙れが出たか東郷先生は床についておられた。しかし選手一同いたって元気ですぐにトランプ、花札に興じていた。流行語を使うなら皆ドライである。

夕食後反省会を開く。十一時近くまで活ぱつに議論がかわされた。途中岩田さんに電報「ケントウヲシュクスL皆シュクスをイノルと間違え憤慨する場面もある。

栄光が西関東代表になれたのもインナートとして出場した綱島さんの力によること大であると皆思っている。そのメジロさんが昨夜の夜行で川喜田さんとともに応援にかけつけてくれた。そして今、一人暗い六甲の坂をおりていった。今夜の夜行で帰るのである。皆の心は感謝の気持で一杯であったと思う。

第四日　一月四日(金)《大阪見物》

皆敗けてしまってかえってほっとしたのか、グッスリ寝た。

例の通り朝食をすますと今日の予定が発表される。

八時半ごろからヒルケル先生の案内で校内を見物させていただく。すばらしいと思ったのは図画室と目下新築中の体育館と講堂である。校舎は四階建ての立派なもので、中学が三組づつ高校が四組づつ、そして栄光でいう理科校舎が全部一つにまとまっている。一大発見、教員室の臭いは栄光と全く同じである。

九時半浦和と修道の好カードを見物に行く。選手章があるから入場料百円を払わずにすむ。終了後、食事(勿論昼飯)代一人当り百円もらって自由に市内見物に出かける。しかし結局、高一九人と、高二十一人の二つのグループに別れただけであったが。

高一の方は大阪駅からバスで心斎橋まで行き、心斎橋筋で食事にすることにした。ところがこの食事をとるまで大へん、皆安くて、盛りがよくて、うまそうな店とぜいたくすぎてなかなか入る店が決

らず、しまいには殺気立ってきて歩きまわること一時間とうとうたまらなくなって、ある店にとび込むと考えるのももどかしく〝カッドン〟、いやそのガックことったら!!!!。ともかくもはらがはったので又歩き出す。ある本屋で市内地図を求めそれにみちびかれ、道頓堀リを通って、更に大阪城まで歩く。大阪城の公園のベンチで休んでいるとバスがとまって、高二の連中が降りる大阪なんて狭いものだ。そこで(大阪城)一時間程過し市電で大阪駅まで、そして阪急にのって、制限時間の十五分前に帰ってきた。

いっぽう高二は二十分程遅刻、罰として食事の後かたずけ。

高二が帰ってきたとき、栗原さんの酔ぱらいのまねが実にうまかったので東郷先生も一寸と本気にされたようであった。

夕食後、明日の六甲との親善試合後の茶話会の為の歌の練習を行う。東郷先生曰く「蹴球部としては上出来だね。」

十一時過ぎ皆夫々楽しかった今日一日のことを考えつつ床につく。

第五日　一月五日(土)

今日は午前中六甲山巡りをして午後から六甲学院との親善試合である。

途中で何度も道を聞いてやっと摩耶山ケーブル登り場に着く。五分と待たずに十時発の車に乗り込んだ。(地上ケーブル)これを降ると更にそこから空中ケーブルカーに乗りかえ摩耶山頂に無事着く。

空中ケーブルの方は定員二十五人であったが車掌も入れて二人ばかり多過ぎた。千仞の谷とまでいかなくともチョッとスリルがあるところである。こゝで望遠鏡を見ると(二分間十円)!!!!六甲はもう練習をしていた。

マウントコースターとか称するものに乗り込んで運チャンの来るのを待っていたが、どこかに遊びに行ってしまったとかで駄目だった。又下の方の池には氷がはっていた。はじめはおっかなびっくりのっていたが何ともないとわかると、アイスサッカー?をやったりさわいでいると上の方で「コラア土足でのってはあかん」とどなっている

そこから更に又バスに乗って六甲ケーブルの六甲駅まで。ぐにゃ

ぐにやの道をゆられていくと右手に淡路島が見えたり、収場があったり、国立公園だけのことなきにしもあらず。ケーブルカーが出るまで四、五十分の間、売店で土産を買ったり、食堂に入ってソバを一杯食べてマッチを三つも四つももらってきたりしている。

十二時二分発の車にのり土橋まで、そこから更にバスでおりてきて、又あの坂をエッチラ、オッチラ登り六甲に帰ってきた。

昼食はカレーである。そして六甲の生徒と一緒に食べた。

ところでこのカレーをよそったのがボケサン、初めあまり景気よくよそい過ぎて三、四人分足りなくなってしまった。仕方なく栄光の方から少しずつ払いもどした。六甲の人がこれを見てクスクス笑ってた。

食事が終ると又あの坂を降りて試合場神戸高校グラウンドに向う。六甲には満足な蹴球用グラウンドがないのだ。

試合のことは別に書くことにする、が、その試合中のことを一つ。ゴールにネットがない。だから得点か、ゴールキックか審判によくわからない。シュートが決って、しばらくしてからピーッとなる。

五時近く神戸高を後にして又、六甲へ。一人おきに栄光の生徒と六甲の生徒が席をとり自己紹介の後いろいろと話しをしだす。そして昨夜練習した歌を披露する。最後に両校校歌、ほたるの光を歌って別れる。皆が帰った後、六甲の主将と雑談をする。いろいろと両校の弥子を---。やがて夕食の準備が出来たと聞いて彼も「大阪駅に明日はきっと見送りに行きます」といって帰っていった。

いよいよ明日は家へ帰る日だ。皆夫々土産をまとめたり、荷物の整理してて、最後の夜を大いに楽しく過した。

第六日　一月六日(日)

七時半ボケサンにたゝき起される。信者は一時間前にミサに出かけたそうである。朝食が遅れるので先に大掃除をする。終って六甲での最後の食事をしていると、栄光の校長先生がいらっしゃる。一わたり見まわして、それほどがっかりしてないらしいとおっしゃった。食事後、六甲の校長先生が、別れの挨拶

「近頃の学生スポーツのあり方

には考えさせられる点が多い。きれいに敗けるということも大切だ。

君達の態度を見ていて気がついたことだが、試合前よりも試合に敗れた後の方が態度が明るかった。今後校長だけの交りだけでなく生徒間の交りも深めていきたい。

これからも、もっともっと努力して、どうぞ来年も来て下さい。」

前に書くのを忘れたが、篠塚君と渡名喜さんの二人は往復切符の復の方まで切ってしまった。そこでこの二人で先発して大阪駅で急行巻を買ってまっていることになった。他の者はすっかり後かたずけをすましてから先生、コックさん等にお礼を述べ、又ヒルケル先生の案内で〝満域なれば心せよ〟というところを心して見せていただき、又荷物だけ自動車で。

十時過ぎ六日間暮らした六甲学院を後にする。この急な坂も今日が最後――すべてに名残りを惜む。そして六日間の間に数回乗ったこのせわしない電車、阪急にもこれが最後。

十一時大阪駅につく。急行巻をもらいプラットホームに上る。

幸い、偶然にも川喜田さんがいたので列の前の方に並べる。

十二時三十五分列車がホームに入ると、大人達のみっともない行為にあきれながらともかく全員席をとれる。

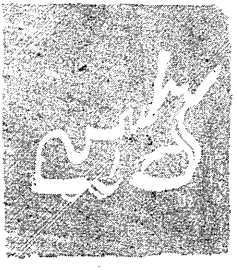
約束通り大甲の主将木村君と、井上君が来てくれた。いろいろ、お礼等をいっているうちそろそろ汽車の出る時間である。彼は僕達一人〈と堅い握手を交わすと列車から降りていった。

大きな、たくましい手だった。彼と握手した時皆きっと来年も来ようと思ったにちがいない。

十二時五十分汽車は大阪を出る。窓から「サヨナラ」と大阪独特のアクセントで、彼の顔がのぞいた。

来年もきっといらっしゃいといっているような顔が――。

（完）



六甲学院との交歓会

以前から考えられてはいたが、なにしろ遠過ぎるので実現しなかった六甲学院の蹴球部との交観会が、全国大会に出場する為に、同校お世話になっていた一月五日に行なわれた。

摩耶山頂の望遠鏡で六甲はどこだと探していると…、あった、あった。おゃ、あっ六甲の人達はもう練習しているぞ。今日は午後から我々がお世話になっている六甲学院の蹴球部との交歓会が行われるのである。

昼食（カレーライス）を六甲の人達と一緒にすますと、親善試合のやる神戸高校のグランドに向う。六甲には試合の出来るようなグランドがないのだ。栄光なんか恵れているなあと思った。昨年の国体に使用したそうでグランドは良い。しかしネットがないのでどうも感じが出ない。三時四十五分キックオフ、三十分ハーフである。栄光は神奈川県じゃない西関東の代表である。絶体に負けられない。

前半終って3－0とリード、これならまず大丈夫だろう。栄光のフォワードは「よし、後半は五点入れてやるぞ」などと大きなことをいっている。後半のレフェリーは頴原さんである。栄光、ただでさえ疲れているのに午前中六甲山巡りをやってきたものだからみんな全々動きがにぶってきた。

結局4－1で栄光が勝った。

栄光の者が皆着換えを終る頃まで六甲の人達は走っている。みている方が疲れてくるようだ。又荷物は六甲の自動車に頼んでバスで神戸高校から帰ってきた。皆ほんとうに疲れたような顔をしている。

お茶とお菓子とミカンが配られ栄光生の間に一人おきに六甲の人がすわる。東郷先生の挨拶のあとGKへ一番）から自己紹介、両方ともGKがキャプテンだ。（六甲

の方は高一）そしてRBがサズキヤプテンである。

六甲のサズキヤプテンの井上君の自己紹介

「副主将の井上です。今日の試合は勝つつもりでした。しかし負けてしまいました。この次はきっと勝って見せます。今度来た時は遠慮して負けて下さいよ。」

夫々いいたいことをいって自己紹介を終る。

お菓子を食べながらいろいろと両校の様子等を語り合う。

六甲には〃オナス〃がないかわりに席順がある。とか強歩会は五十七キロだ等と六甲の様子を知る。

「早慶戦はどんなですか。」とか、「銀座通りと、道頓堀りとはどっちがにぎやかですか。」等と聞かれた。勿論得意になって答えた。

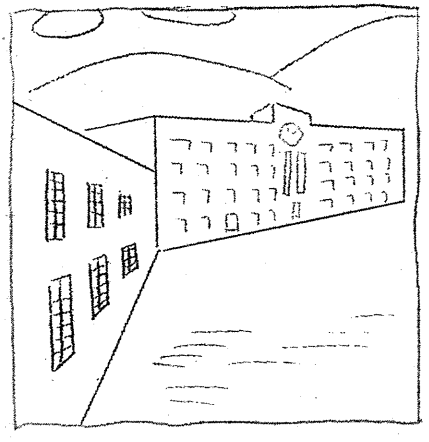
しばらくしてから、昨夜練習した歌を披露する。まあ〳〵の出来だった。六甲の方は「植生の宿」の独唱が一つあっただけだった。暁星との茶話会みたいな雰囲気はでてこなかった。六甲はあまり歌が盛んではないらしい。岩田さんと石原さんが二重唱をやってもう歌は終り。誰もやらない。

最後に六甲の校歌、栄光の校歌そして、蛍の光を歌って別れる。来年またこゝでこうして愉快に過すことが出来るといいんだが。

六甲の人皆が帰ったあとに、主将の木村君と井上君が残ってしばらく又話をしていく。

六甲ではエリのあるYシャツを着てはいけないとか遅刻すると罰作業だ等いろいろなことを聞いている中に、夕食の仕度が出来る。木村君と井上君は、「あしたは何時の汽車で帰られるのですか。」「なにわです」「じゃあきっと大阪駅まで見送りに行きますよ。」と帰っていった。

本当に楽しい一日だった。ここで夕食をとるのも今日が最後、是非来年も来たいものだ。



日記より

佐々木民雄

一月三日(水)≪晴れ≫

今日はいよ〳〵第一戦だ。少し早めに試合の行われる西宮球場に行き外の広場で体操と軽い練習をやった。金子先生も応援に来て下さった。第一試合の藤枝東高対富山中部のタイムアップのホイッスルと同時にグランドに飛び出しシューティングをやる。十二時相手のキックオフで試合開始。まだファイトがもえないうちに、ものすごい勢いで押されてたちまち二点とられてしまった前日の雨でグランドが柔らかくなってしまって、特にゴール前では足をとられて瞬間のダッシュが効かない。二点とられても勝つ自信が充分あって落着いていた。この二点に対し何か全員とはいわないが、意気込といおうかファイトといおうかとにかくそういったものに欠けていた様である。僕の考えでは力の出し惜しみがあったと思う。しかしその後次第に押しはじめ、あのいつものパスワークが出て来て遂に一点返した。前半終りのホイッスルまで押し続いたと調子が出て来たからもうこの試合は勝つと思った。後半が始ると、又一点とられる。少しまずいとは思ったが負けるという気はしなかった。時間は刻々と過ぎまた一点とられる。もう時間も余りないので、あせりだすそして試合はますます激しくなる残念ながら僕のゴール前でのタックルの後の球の処理の悪さから遂にとどめの一点、五点目を与えてしまった。必死の追撃も空しくタイムアップのホイッスルは、無情にも僕達をセンターサークル附近に呼びあつめる。五対一という得点で敗れたのだ。相手のバックは特にCHが攻撃に際しても強く、彼のフリーキックは正確で強いのでとてもこわかった。相手の試合態度はあまり好しくなかった。

夜はバックが弱体であるということから、部生活、練習のこと等真剣に語り合った。(七期生)

今昔物語

文部省 川崎岡崎雄

〃溝堀リ〃

グランドが今のと直角であった頃の話、その頃中一であった私には、理由が分らなかったがグランドのりんかくに溝を堀った。きっと草がはえすぎて、ラインが分らなかったからであろう。良く堀った。その頃の練習はかならずこの溝堀リが付き物であった。

〃ニューボール〃

部に入ったのは五月であったが十一月まで、蹴球部にはちゃんとしたボールが一個も無かった。それまで何をしていたかっだって？今、運動場で使っている様なゴムボールであった。また部員全体が集まらぬといって、そのニューボールの使用を延期した事があった様に思った。ついこの頃まで行っていた習慣で、じゃんけんで、ニューボールを蹴る順をきめた。私も一回一番最初にニューボールを蹴る光栄にあずかったことがある。

〃最初の試合〃

金沢八景にて希望ケ丘高と部として最初の試合、昭和二十六年十二月二十日、大分長い間勝率を悪くしていた試合、与えた得点実に十一、こちらは零、技術的にはもつと高れていた。しかし、記念すべき、又、誇るべき試合である。誰がこの時、後楽園のいや西宮の

栄光のサッカーチームの姿を想像したであろう。

〃東日本高校蹴球選手権大会〃

我がニュースフラッシュには先頃の東日本での、我がチームの成績に対して初出場でと書きたかったであろう。迷惑げに昭和二十七年に出場と書いてあった。その試合では三対〇、しかしこの試合で受けた、影響大である。少なくともこの時ボール一個紛失でボール係が要ることがわかった。又、この時の一週間前あたりの練習のすごさ、少くとも今までの最高であった。そして、皆、熱心であったのも今までの最高。

〃東郷先生〃

昭和二十七年九月十五日の会議で東郷先生に部長になって戴くことになった。それより今まで、まだ当分の間は部長の心配はないがこの部長、昔は試合を見にくるとその試合敗けたのも、いっの間か逆になった。

〃鎌倉学園〃

鎌倉学園とは良く試合をした。昔は段違いで向うが強かった。とに角、やると向うの赤いユニホームが一人で動いて半グースも点を入れた。ペック、チャンピオン、熊、皆懐しいニックネーム、とも に名選手であった。今はいづこ！

〃ゴールゲッター〃

蹴球部に居てゴールを奪ったのが五回もない、しかし、中学最初の四十米あたりからのシュートはこの私のもの、見事キーパー強襲(?)で得点、又、ペナルティーゴールを一番最初にきめたのも私、何点も入れた、中村君とか、永島さん、浅羽さんはもう得点の感激も薄かろうと思うが、中学校、最初のゴールを決めた、私、そして、その経験の数少ない私にとって、今ではその得点は印象深いものである。

〃ディフエンス〃

今のバックスが果敢でないと言われるのは、昔のバックスは非常に果敢であったからで、それは昔のバックスの唯一の武器であった。特に、GK矢島さんのスライディングでドリブルする相手フォワードへのつっこみ、又、半分後からのFBのすべり込み、これは印象的で

あったのは、対藤高での三田さんの危機一発のスライディングである。

私が昔右のバックスのころ（泉頭さんがセンターハーフをやっていたころ）コンビネーションの相手、つまり左のウィングが、足の速いヌ、ぬくのがうまい浅羽さんで取りに行くとかならずものでなく、抜かれ、センターリングをされた、どうしても取れずドリブルを食止められず抜かれる度にキャプテンの戻れの声を聞いていた。その内に、抜かれ方を研究し、うまく抜かれる様にと思い、色々やって見て、ドリブルの半分を食い止める様になった。自分でもうまくいったと思ったのは、敗けた試合だが、慶応高校との試合で、その時のウィングは、今K.O大学の二年生でレギュラーのN選手でその時はさすがに相手が上手であったから半分は抜かれたが、後は確実に取れた様だった。

〃ユニホーム〃

初めはなかった。今でも部室の何処かにあるかも知れない、紺のシャツ、再生であったが、試合に間に合せに、佐野大先輩が考案、そろえたが、色、形ともまち〳〵であった。でも今のユニホームより良い様な気がする、それは、そのユニホームを作るのに私なども大変苦労もし、又、それを着ていた頃は本当に蹴球を一生懸命やろうと云う気持で、一杯であったから。これは、はっきりした事では無いが今のユニホームの色は学校の帰りに湘南田浦駅にはってあったポスターの色をこんな色が良いよとその頃の会計、佐野殿下に申し上げた色それは、私の考えた色である。

※　※　※

今日この頃は忙がしいので、これ以上書いていられないが、このザッシが続くならそれにつづいて私もこの今昔物語を続けて行きたい。

早六年、中一の時に、これぞと決めて、入った部でもう大の古狸もう皆にやめろ〳〵と云われる。いやがらせの年になった。栄光蹴球部ではもう終りだが、でも私の蹴球生活はこれからだ。蹴球部とチャーシュー、そして、蹴球と、チャーシューも離れられそうにない。

第4位

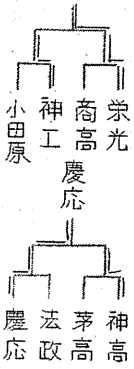
東日本大会記録

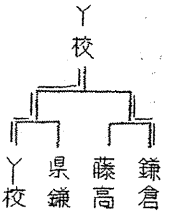
七期生　小川　弘

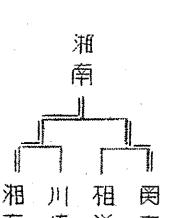
古い話であるが昨年一年間の蹴球部の活躍を思い出す時に、まず東日本大会出場、そして四位獲得次に全国大会初出場であったろう。特に東日本大会での大活躍はまだ僕の脳裏にはっきりと写っている。蹴球部雑誌の初版発行に当ってこの大会の思い出を僕の手記より抜きだしてここに、記する次第である。

○神奈川県予選

この大会へは神奈川県から四チーム代表を出すことになっていた。次はその組合せである。

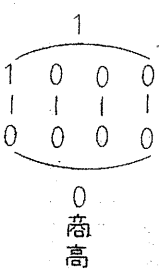






このように本県からは湘南（一部）栄光（二部）、慶応（一部）Y校（一部）と決定した。しかしこの時の栄光の成績はあまりほめたものではなかった。

▽第一回戦　七月十四日(土)
快晴（先蹴）商高　三時
成績



定期試験後間もなく、なのでか、押していながら得点できなかった。延長十九分ようやくし

W岩田よりチャンスをつかみCF中村へパスそしてこれを決めてようやく勝てた。それにしても試合時間八十分の内七十九分に入ったんだからおどろいた。

第二回戦　七月十五日(日)
曇り（先蹴）神工　十時
（成績）
栄光2（1－1　1－0）1神工

前半すぐ栄光調子をだして速攻で一点先取すれば、神工も前半終り近く一点かえして同点となる。

しかし後半に入っても両チーム互角で中盤戦が続きそのまゝタイム、アップになるかと思われた。二十六分岩田のシュートきれいに決って勝った。昨日の試合といゝ今日の試合といゝ、少し栄光は反省する必要があるんではないか、と思えた。

七月二十三日～二十七日まで合宿。これで栄光は大いに力を養ったと思う。東日本大会の大活躍ここに基があるのではなかろうか。

○遠征記

▽第一日（七月三十日(月)－出発－

横須賀駅、十二時頃の電車で、そろって出発。ちとまごついたがともかく我らの宿舎、上智大のかまぼこにおちつく。このかまぼこは上智の聖堂のすぐ横に並んでいる。一見、米軍の基地のような感じがしたが、内部はおそまつながらたゝみが敷いてあった。

三時半より上智のグランドで練習を開始した。このグランドは音の外濠の一部で、すぐ上を中央線が走っている。濠の底でやっているのでまわりがかこまれていて、変な感じがした。

夕食の後、東郷先生の案内で散歩をした。さっきまで練習していたグランドはゴルフ場と早変りをして、盛んに白い小さな球が飛んでいる。我々田舎者はこれを物珍らしそうにながめた。濠の向うには、緑の木々の上から赤レンガの国会図書館が夕日に照らされていた。

帰ってからは思い思いに　楽しくすごす。

すっかり忘れていたが、今日とんだエピソードがあった。というのは、高二の入った九号のかまぼこの鍵が紛失したのである。このため高二は丸いトタンの屋根を這

つて窓から乱入した。たゞしこの鍵は一時間後に出てきた、いや戻つて来た。もう一つ食事が合宿より上等なので安心しました。

十時、寝るんだが毛布と敷布しか持つてきてないのでこまつたがどうにかねむれた。

▽第二日（七月三十一日㈫―入場式―

七時に起きて体操、食事をすませて、八時二十分に上智を出た。入場式は競輪場で行われたが、あまりおそまつなのであきれた。まづ裏に整列するのだが、それにも手こづつていた。係員にどなられながらようやく整列し、行進に入つたが音楽が早くて足に合わず、まつたく見つともない。

式は形どおり進んで、選手宣誓が前年度優勝の韮崎のキャプテンによつて行われた。その内容は例のとおり堂々と戦うことを誓いながら、すぐ式の後で行われた、城北対韮崎の試合で韮崎はきたない反則をくりかへしていた。だがこの試合は城北が勝つたのでまあよかつた。

又昨日と同じく三時から練習をして、明日の相手は藤岡高である。明日の相手は藤岡高である。

しかし何といつてもかまぼこの暑さにはまいつた。全部トタンなんだからたまらない。日が当つている時などは、本当にむし風呂に入つているようで汗が全身からふき出てくる。横須賀に居たら泳ぎにいくんだが、何んともここではしようがない。そこで皆は教会の横にある立入り禁止の芝生に入つて、どうにか昼間をすごした。

夜はみなばら〳〵に散歩に出かけて冷いものをたべた。高一の、小川、栗田、佐々木、東郷の四人は何とはなしに新宿にむかつて歩きだしたが、しばらく歩いて、よさそうな氷屋に入るために又もどつて来た。とある氷屋をのぞいたところ高二の連中がいるのを発見我等もここに入ることとした。

▽第三日（八月一日）㈬第二回戦

天下晴れて日本晴れ！　カマボコ暑きこと限りなし！　あゝ無情!!　我等精鋭十七人勇みて上智の学舎を出ず。前途は希望の光輝きたり。

けして暑さのために頭がおかしくなつたのではない。今日の試合に勝てたのでついこんな文が出てきたのだ。たしかに栄光は勝とう

というファイトにもえていた。

僕達は御茶ノ水の駅から東大行のバスに乗り、終点で降りた。そして裏門より出て又入った。つまりこんどは農学部へ入ったのである。本陰に陣取り、練習開始。蹴球部員の外にも高二の生徒が多く応援に来たし、矢板君のお父さん栗田君のお父さんも見にこられた。

第二回戦（先蹴）藤岡高、三時於、東大農学部グランド

（成績）

栄光3（3－1 0－0）1藤岡高

藤岡高1112（得点）

CK ①前5分LW岩田
FK ②前23分RI佐々木
GK ③前27分CF中村

栄光 6 3 9

（批評）

前半初めは上っていたが、相手のミスをチャンスとしてLW岩田がきれいに決めて栄光を元気づけた。だん〳〵調子の出てきた栄光は、二十三分藤高陣の中央あたりからのRI佐々木のロビングが藤高GKの頭上をぬけて幸運な一点を加えた。又RH瀬出井の活躍で二十七分CF中村、ボールを得て三十ヤード独走、おちついて決めて又も一点追加。ハーフ、タイム直前、藤岡はRWよりチャンスをつかみLIこれをうまく生かしてCFがゴールして一点を返した。

後半、栄光は度々チャンスをつかんだが、ものに出来ずそのまゝタイムアップ。後半もう少し慎重にすべきだった。

宿舎に帰って夕食の後で、反省会が開かれた。ここでは今日の反省ばかりでなく明日の作戦も練られる。明日の必勝を誓って、かいさんした。

▽第四日（八月二日）㈭第三回戦

ついに栄光チームは準々決勝に勝ち進みたり。

第三回戦（先蹴）大泉高、四時半、於、東大農学部グランド

（成績）

栄光2（1－0 1－1）1大泉

大泉1216

CK
FK
GK

栄光5 6 6

（批評）

前半十二分、CF中村の独走、

シュートがキーパーにあたってゴール前を点々。これをホローしたLW東郷がおちついてきめて一点リード。このために大泉GKは負復。

後半に入って敵RIのロビングをGK栗原キャチせんとするのを、敵CFにはねとばされて一点をとられてあぶなかった。しかし栄光は自信を失わず、二十分、ゴール前の乱戦、東郷もちこんで一点リードそのまゝおしきった。

この試合は見ていてあまり気持の良いものではなかった。というのは大泉のCF岡村は前日新聞に名がのったので大いにえばり、GK栗原を大いに悩ました。FKの大部分は不当なキーパー、チャージであった。これを見るに見かねた栄光のCH川喜田が彼を説教した。その効果はともかく、試合中説教するとはまったく川喜田君ならではである。

勝因は一つにCH川喜田の徹底的マーク、又RH佐々木のヘディング。GK栗原の好守であったろう時にRH佐々木のファイトはすばらしいものがあり、敵の二本のCK、みな絶好のものであるが、これを見事なヘディングによりピンチをまぬがれた。又威力のあるスライディング、タックルも敵をおびやかした。

第五日（八月三日）㊎ 第四回戦

栄光学園、強敵優勝候補浜松西を下し優勝街道爆進。

第四回戦（先蹴）浜松西、四時半、於後楽園競輪場

（成績）

栄光2（1－0 1－1）1浜松西

栄光5 9 16（得点）

CK ①前1分CF中村
CFK
CFG ②後18分LW岩田

浜松3 3 12

（批評）

前半一分、CH川喜田の大きなロビングをCF中村が独走して軽く決めた、浜松西は栄光をあまく見たのだろうが、あまりあっさり入ったので気がぬけた。この先取点で大いに気をよくした栄光は浜松西の鋭い攻撃を持ちこたえた。

後半に入っても栄光元気で十八分、ゴール前の混戦よりLW岩田飛びこんで、一点加え、勝利をつかんだかに見えたが、浜松も最後まであきらめず、二十五分、浜松LI鈴木（鋼）が中央線より独走

してセンター、リングしたのが、栄光GK栗原の手をぬけてシュートとなって決まり一点を返した。以後栄光あぶなく見えたが、よく守り通して明日の準決勝へと進んだ。

勝因はFBの活躍と、インナーの広範囲にわたる活躍、それと皆のファイトであろう。栄光の応援も多く来て良い態度を表わした。

帰ると宿舎の人達も大いに喜んでくれた。すぐ敗れて帰るつもりがこんなになってしまった。

▽第六日（八月四日）(土)一準決勝

栄光学園惜しくも抽選敗。岩手県代表遠野高校に善戦1－1で延長に入っても決まらず抽選になった次第。

準決勝へ先鋭）遠野高　四時半　於後楽園競輪場

栄光1　1－1　0－0　0－0　0－0　1遠野

栄光3　9　9　7（得点）
CK
FK　④前16分RW戸村
GK
St

遠野2　5　2　5

（批評）

前半、最初ぐっとおされて危くついに十五分　遠野LW佐々木(弘)栄光のRH佐々木、FB渡名喜をLI細野とのパスでたちまちぬいて、頂中へ返したのをRW菊地(千)が栄光GK栗原の逆をついてシュートしてこれを決める。

しかし栄光もすぐにチャンスをつかみCF中村のシュートを遠野GK新田はじくのをRW戸村プッシュして同点とする。これから大接戦がつづき、中盤戦が長くつづいた。遠野のLI、LWは強い。

後半に入って、押されながらもよくチャンスをみつけ、ゴールをおそったが得点にならなかった。特に十八分綱島のシュートはゴールバーに当って出てしまった。

抽選の時、栗原君はトスで勝って自分で下を引いた。不運！　それは負くじであった。

帰りさすがに皆元気なく、気がめいっていた。しかし夜反省会のころから元気が出てきた。明日は必ず三位になりたいものだ。

▽第七日（八月五日）(土)

栄光ついに四位となる

東京代表へ優勝浦和西に2－0

で敗れた）敦大附との試合は連日連戦のためか、最初から終りまでおされつづけた。

三位決定戦（先蹴）敦大附　三時　於後楽園競輪場

（成績）

栄光0（0－1、0－2）3敦大附

栄光　0　1　2　8
　　CK　FK　GK　St
敦附　5　0　3　14

（批　評）

前半三十分、栄光ゴールキックRI佐々木うまくCF中村へパス十メード独走、シュートせんとしたが敦大附GK川村、身を挺してこれを防ぐ。ホローがなくボールは転々とゴール前を横切った。

後半は一そうひどくなり、二十二分LW岩田とLI綱島とのパスで二人かわして岩田シュート、はずれたが見事であった。

決勝では浦和西が3－0で遠野を敗り、優勝、この後で閉会式が行われた。ここでの態度は栄光が一番立派であった。

全部終って清々した。ともかく思いもよらない四位にまで進出してとてもうれしかった。特に加藤さんがもってきてくださった朝日新聞神奈川版に出ていた記事は我々を喜ばした。これで何か大きな功績でもしたような気がしてうれしかった。

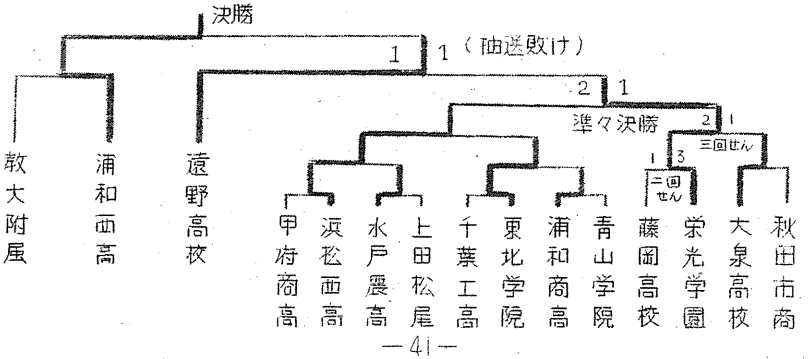
▽第八日（八月六日）（月）－帰宅－

きのう半分の者が帰ったので、残りで大掃除をして、一週間御厄介になったカマボコに別れをつげた。皆のTシャツは汗で黄色くなっていた。

－終り－

第五回東日本高校サッカー選手権大会　（参加196校）

優勝　浦和西高　　三位　敦大附属
二位　遠野高校　　四位　栄光学園



作文

蹴球部に入って

（その一）

九期生　田代　和生

僕は中学一年の二学期になってどの部に入ろうかと考えた。その時、迷ったのはサッカーにしようかバレーにしようかということだった。最初はサッカーを何となくやりたかったのだが、姉にバレー部に入ったらと云われるとバレーも面白そうに思えるし…。母に聞くと「サッカーがいいでしょ」といった。結局蹴球部に入ってしまった。その時には別にはっきりした動機があったわけではないが、後で考えると僕がサッカーを選んだのには父の影響が大であったと思われる。父は中学、高校時代にサッカーをやっていて、中学の時は寄宿舎にいて毎日の様にやっていたという話をしばしば話してくれた。父も僕と同じくフォワードをやっていたそうで、時々動き方等を説明してくれたりする。しかし僕がどの部に入ろうか、サッカーにしようかバレーにしようかと迷っていた時、父は別に蹴球部に入れとすゝめたりはしなかった。

とにかく蹴球部に入ってから一年余り、一番感じたことは、蹴球部はほんとうに家庭的な部であるということだ。このことは僕にとって大きな喜びである。そしてその中から生れたチームワークのよさで、中学校は県下一位、高校は全国大会にまで出場するという立派な成績をおさめる程になったのである。父もこれには驚いていた。父の中学時代にもやはり全国大会があったそうだが、その時に地方予選であっさり敗退してしまったという話だった。だから僕は父の前では少々鼻が高い。

これからは僕達もますます頑張って、よりよい蹴球部にしていくように努力したいと思っている。

（その二）

十期生　松田京司

僕はどの部に入ろうかと思い迷った。文化部ははじめから望まなかったが、さて運動部となれば、テニス、体操、バレー、バスケット、ピンポン、等どれも大好きで捨て難い、母は運動の音痴だから問題外として父に相談することにした。

父は学生時代ラグビーをやったということを五十にもなった今日でさえいまだにそれを自慢話の一つとして、「近頃の若い者は柔弱でいかん。」と口ぐせの様にいっている。恐らく大した腕前ではあるまいと思っただ、意見をたゝいて見たところ、はたして曰く、

「サッカーが一番いいだろう。広いグラウンドを球を追い、他のメンバーとチームワークも鮮やかに縦横無尽にはしりまわる。これが一番いいじゃないか。お前のような乱暴者には丁度いい。だが、練習は苦しいぞ。時には泣きたくなるような事もあるがこれが素なのだ。不とう不屈の精神と頑健な体力がこの中から養われるのだ。これがいい。これがいい。

しかし疲れても勉強を怠らないような自信があるかなあ――。」

僕はバレー等にも充分未練はあったが父にそう云われて見ると、なる程そんなものか。よし！　サッカーに決めた。激しい練習に負けるものか。「それ見ろ」と父にいわれないようにしっかりやって見せようと決心した。

練習は、毎週土旦日の放課後約四時間程であるが、まだいくらも日がたっていないのに楽しくてたまらない。

何も知らない僕達に上級生の方々が手をとるように親切に指導して下さるが、なか〳〵ボールは思うように動いてくれない、上級生の方々の動きを見て、早くあの様に上達したいとつくづく考える。

父がいった通り、練習は相当激しい。疲れもするが、楽しいことこの上なしである。父に最後に念を押されたように勉強も、おろそかにならぬ様努力して、勉強と両立した真のスポーツマンになりたいと思う。

僕は蹴球部に入って本当によかったと思っている。

（その三）

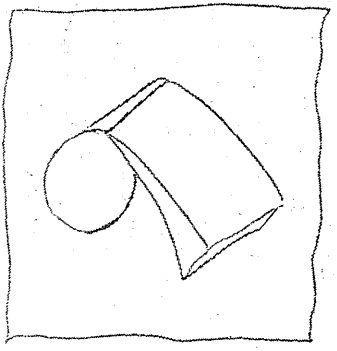
市村　俊一

夏休みもすんで二学期が始まった頃、一年生の僕達も、何かの部に入ることになった。

僕はどの部に入ろうかといろいろ迷っていた時、上級生にすゝめられたので、何となく蹴球に関心を持ちはじめ、とうとう仮入部届を出した。

第一回目の練習の日、十人ぐらいの一年生と一緒に、グランドに行った。もう練習を始めていた高校生を見て、まずびっくりした。みんな、ものすごい勢いでボールを蹴っている。「ぼくもあんなに蹴る事が出来るかなあ」と、少し心細くなった。高校生の注意や、話があって、ボールを蹴る練習が始まった。あんまりうまくいかない。でも夢中で練習した。一汗も二汗もかいて、激しい練習は終った。ほっとして、一休みしながらいろ〳〵考えたが、何だか蹴球部に入って本当によかったというような気がしてきた。

今では、愉快な上級生の人達にまざって練習する土曜日が待遠しくてたまらない。



（その四）

十期生　林　茂

ぼくがサッカーに興味を持ち始めたのは、いつごろだかはっきり記憶していない。おそらく五年の頃からではないかと思う。

興味があるから中学校でサッカー部に入るのは当然である。しかしそれに家の人は反対した。その理由は勉強にさしさわるということであったが、勉強同様に、体を作る事も大切であるとがんばってついに許可を得た。又、もう一つの入部の動機があった。というのは、サッカーというスポーツは団体競技で、友達がおおぜいいる所でなくては出来ない。このような団体競技のよさを味わうのに絶好だと思ったからである。

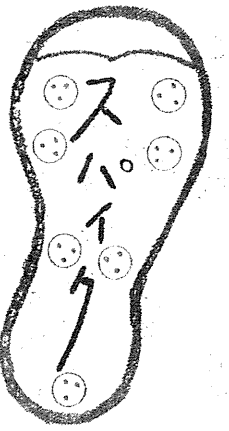
練習は面白いが、つらいことも多い。このつらい練習に負けずにがんばり通せば、そのファイトがサッカーだけでなく、その他のい

ろいろな面に現われてくることは確実だと思っている。

中二（十期生）紹介

昨年九月の募集で仮入部した十期生を御紹介致します。

佐藤晃一　ヨコスカ
黒沢正昭　ハヤマ
加藤弘一　ヨコスカ
小沢進　ヨコハマ
及川洋一　ズシ
大久保幸作　ヨコハマ
平井重文　カマクラ
梶田敏雄　カマクラ
菊地重雄　ヨコスカ
松田京司　ヨコスカ
市村俊一　ヨコハマ
多田弘天　カマクラ
山本遼　ヨコスカ
長谷川勇吉　ヨコスカ
林茂　ヨコハマ
服部昌明　ズシ
原大児　カマクラ



九期生　田畑哲也

やゝ重いスパイクを小脇にかゝえて道を急いでいた。このスパイクの事を思うと、何かうれしいような、誇らしいような感じで胸がいっぱいになってくる。

去年の暮、僕は県命に働いた。日頃遊んでばかりいる僕を見慣れている家族には驚きの種だったろうが、僕はほんとに県命だった。というのは僕と母との間には秘密な取り決めが結ばれていたのである。

丁度二学期の定期試験の時のことであった。連日の試験にふーふーの僕の頭に、机に向っている時、電車での行き帰りの時、又は試験の最中でも、ふっと浮び上ってるものがあった。僕は、何故かむしょうにスパイクがほしくなった。そしていろ〳〵考えている中に、どうも正月にもらえる予定のお年玉だけでは足りないように思えた。兄弟が四人もあって、しかも僕は末っ子である。自分のお年玉はスパイクを買えるどころかその半額にも達しないのではないかと思えた。そこで火ばちにあたりながらそれとなく母に話してみた。すると母は僕に、足りない分だけもうけたらといった。というのは暮の間働けということつまりアル

バイトである。定期試験が終るとすぐ仕事にとりかゝった。冬休みの練習の時も、練習が終るやいなや、いっさんに飛んで帰り一生懸命働いた。仕事はずい分あった。どぶそうじ、障子はり、庭のそうじ、お使い、その他いろいろ。

どぶそうじでは、はねかえるどろをも、ものともせず、木を打ち込んだり、はがしたり、新しく堀ったり、又うめたり、こんなことではやくも一日目でネを上げそうになった。又、冷い風で思わずかじかんでくる手に息を吹きかけながら障子をあらう時や、手ぬぐいで口をおゝい、縁の下にもぐり込んでごみをはきだしたり――。何度か仕事をほっぽり出したくなった。しかしたゞ「スパイク」「スパイク」と思って、くじけそうになった気持を支えつゞけた。

身にしみる冷い夜気に、ふと我に返ると、思わず微笑が浮んでいるのに気がついた。

新人戦の様子

◆二月二日から新人戦が始った。栄光は全国大◆

◆へ出場したままのメムバーで出場することが◆

◆出来るのだが、高二は、勉強が忙しいので高◆

◆一が、主になってこれにのぞむことになった◆

◆。以下は、第二回戦までの、報告であります。◆

第一回戦　於湘南高

栄光3（0－1　3－1）2湘南

強歩会の翌日でしかも午前中映画鑑賞という悪条件であったが、終始押し続けた。前日三十四キロも走ってよくあんなに動けると感心する程である。しかし前半決定的なシュートがなく、相手にPKで一点リードされても平気である。フォワードには二、三点ならという自信があり、バックスは味方フォワードを充分信頼しているからであろう。後半軽く一点返すと

、敵もわずかの隙に又一点リードする、とすぐにこちらも一点、湘南の先生があと十秒だという。2－2のまゝ延長かと思われる、延長になったら栄光に不利だ、なにしろ昨日三十数キロも走っているから――。「東郷！」とCFのナカサンから声がかかる。RW東郷ダッシュして蹴った、入った！あざやかなシュートである。勝ったと思うのと同時にタイムアップのホイッスルがなる

着換えをしながら泉頭さんのレフェリーぶりを見る。希望ヶ丘と吉田島のレフェリーをやるのが、泉頭さんである

第二回戦　於県営グランド

栄光4（2－1、2－0）1茅ヶ崎

皆の顔や頭からユゲが出ている。強歩会の疲れも抜け、今日こそ本領発揮と思っていたのにあいにくの雪である。しかし双方とも元気一杯、昨日の湘南にくらべて試合態度もよく、何とかして栄光に勝ちたいといった気持が相手の茅ヶ崎には見られた。昨日同様又先取点を許す。観衆（といっても茅ヶ崎の応援の生徒だが）の話に耳を傾けるとこんなことをいっている。

「栄光だってこの中には全国大会に出た者もいるだろう」

「そうだよ、だからこれに勝てたら大したもんなんだがなあ」

こんな会話を聞いているとうれしくなって「茅ヶ崎がンバレ」とでもいゝたくなってしまう。

雪で白く薄化粧したグランドでの一時間に渡る熱戦の末、やはり栄光が勝った。神奈川県内で栄光が敗れるなんていうことはあり得ないような気がした。

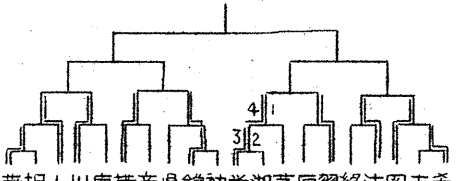
帰りみち、坂を下りながらふと六甲のあの坂を思いだした。雪もいまは雨にかわっている

新人戦、優勝できるかな、

・メンバー・

GK伊橋　栗原
RB奥田
LB中山
RH佐々木
CH篠塚
LH小川
RW東郷
LI栗田　岩田
CF中村
RI金沢
LW生駒

新人戦組合せ



中学校冬季大会成績

◆秋季湘南地区リーグ戦は、本校グランドを中心に行なわれたが、藤沢一中を手始めにいずれも大差で楽勝優勝した。又、それとともに県大会への出場資格も得たのである。

記録

▽第一戦（十月　日）於本校

栄光6（3－0、3－1）1藤沢一中

▽第二戦（十一月三日）於片瀬中

栄光4（1－0、3－0）0片瀬中

▽第三戦（十一月十七日）於本校

栄光4（0－0、4－0）0三崎中

▽第四戦

栄光一不戦勝　鎌倉学園

メンバー

GK平野・林
RB佐伯・内山
LB宇佐美
RH加藤・大泉
CH佐々間
LH石原・田畑
RW井街・長嶺
RI山崎・飯田
CF林
LI山井・吉田
LW塩谷・菅沢
佐藤・田代

神奈川県大会成績

▽準決勝（二月三日）於県営

栄光0（0－0、0－0、0－0）0千代中

（抽選勝ち）

土旺日の高校の試合の際、帰る時湘南高の先生に聞いてはじめて県大会があるということを知った。しかもそれが翌日の午前十時からである。栄光には何の連絡もなかったのである。とにかくここにいるものが出来るだけ連絡をしてなんとか十一人集めて見ようということになった。

「栄光、最後まで頑張ろう！」と栗原さんが一生県命はげましている。この寒い雪の降る中で栄光の中学生十人が必死で闘っている。

どろまみれの顔からはゆげがぽっぽっとでている。十人しか集まらなかったのである。そして半分は中二の生徒だ。前、後半二十分ずつを終り、十分ずつの延長も終って更に今五分ずつの延長も終った0対0、よく頑張ったほんとうによくやった。強歩会の翌々日ではまだ足も痛かったろうに!!!。

岩淵さんが十円玉を投だた。落ちた。両軍のイレブン一せいにのぞきこむ。裏だ!栄光が勝った。あれだけ押し続けて、抽選で敗れた千代中の者は本当に残念だったろう。しかし栄光も実によくやったのである。

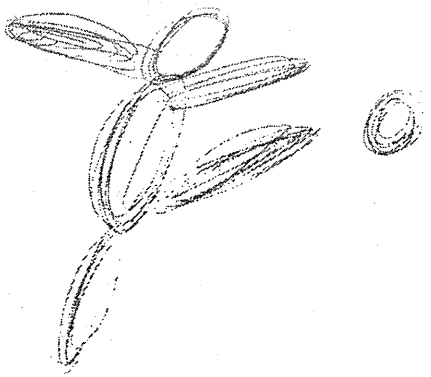
栄光が千代に抽選勝ちしたのはこれで二回目である。

午後からの白山中との決勝戦には棄権することにした。

隣りのグランドでは高校の新人戦、対茅ヶ崎が始っている。

・メンバー・

GK　林
RB　石原
LB　宇佐美
RH　欠
CH　佐々木
LH　平野
RW　吉田
RI　山井
CF　林
LI　佐藤
LW　水谷



新役員紹介

去る一月二十六日(土)例年より少々早いが新役員の選挙が行われた。(役標者数三十一名)その結果は、次の通りである。

主　将　佐々木民雄(RH)
副主将　小川　弘(LH)
会　計　栗田　秀樹(RI)

「今年のような好成績を維持していくのはむずかしいことだとわかっていますが、出来るだけ維持出来るように努力します。」と、簡単に挨拶した。

過去5年間の成績

昭和26 ～ 30年

○高等学校○

年月日	相手校	試合種類	得点		失点		勝	敗	分
26、12、21	希望ケ丘	練習	0	0	11	11	0	1	0
27、8、21	明治	東日本大会	0	0	3	14	0	2	0
8、30	藤沢	練習	0	0	3	17	0	3	0
8、31	〃	国体予選	0	0	3	20	0	4	0
10、5	小町	練習	2	2	1	21	1	4	0
10、19	関東	三部リーグ 1	1	3	1	22	1	4	1
11、3	藤沢	〃 2	3	6	1	23	2	4	1
不明	希望ケ丘	練習	0	6	1	24	2	5	1
11、30	鎌倉	〃	1	7	5	29	2	6	1
28、1、24	〃	〃	0	7	2	31	2	7	1
28、4、25	鎌倉	練習	2	9	8	39	2	8	1
4、29	茅ケ崎	三部リーグ 1	1	10	0	39	3	8	1
5、10	相洋	〃 2	0	10	0	39	3	8	2
5、17	藤沢	〃 3	5	15	1	40	4	8	2
5、24	関東	〃 4	4	19	0	40	5	8	2
6、28	緑ケ丘	〃 5	8	27	2	42	6	8	2
7、19	相洋	リーグ決勝	4	31	0	42	7	8	2
8、29	茅ケ崎	国体予 1	9	40	0	42	8	8	2
9、6	湘南	〃 2	0	40	1	43	8	9	2
10、24	鎌倉	練習	1	41	2	45	8	10	2
11、3	〃	〃	1	42	1	46	8	10	3
11、22	翠嵐	全国大会 1	4	46	0	46	9	10	3
11、23	川崎	〃 2	2	48	0	46	10	10	3
11、28	小田原	準決勝 3	0	48	1	47	10	11	3
29、不明	湘南	練習	1	49	2	49	10	12	3
4、6	湘南	練習	2	51	2	51	10	12	4
5、1	湘南キッカーズ	公式	12	63	0	51	11	12	4
5、15	緑ケ丘	国体予選 1	4	67	3	54	12	12	4
5、16	〃	〃 2	1	68	0	54	13	12	4
5、23	小田原	〃 3	6	74	1	55	14	12	4
5、30	保安大	準決勝 4	0	74	1	56	14	13	4
6、12	鎌倉	練習	2	76	1	57	15	13	4
6、21	〃	〃	3	79	1	58	16	13	4

7、	暁星	練習	3	82	1	59	17	13	4
9、13	商工	二部リーグ 1	7	89	0	59	18	13	4
9、26	神工	〃 2	4	93	1	60	19	13	4
10、2	慶応	〃 3	1	94	3	63	19	14	4
10、16	翠嵐	〃 4	4	98	0	63	20	14	4
10、23	希望ヶ丘	〃 5	5	103	2	65	21	14	4
11、7	商工	全国大会	0	103	1	66	21	15	4
11、13	鎌倉	練習	4	107	1	67	22	15	4
30、1、30	川崎	新人戦	3	110	0	67	23	15	4
2、6	翠嵐	〃	0	110	3	70	23	16	4
不明	鎌倉	練習	4	114	2	72	24	16	4
30、不明	小田原OB	練習	4	118	1	73	25	16	4
〃	神工	リーグ戦 1	3	121	1	74	26	16	4
〃	商工	〃 2	5	126	1	75	27	16	4
〃	関東	〃 3	1	127	2	77	27	17	4
〃	茅ヶ崎	〃 4	2	129	2	79	29	17	5
〃	翠嵐	〃 5	4	133	0	79	28	17	5
〃	緑ヶ丘	〃 6	2	135	1	80	29	17	5
9、3	湘南	国体予	0	135	5	85	29	18	5
不明	暁星	練習	2	137	4	89	29	19	5
〃	関東	〃	3	140	3	92	29	19	6
11、13	川崎	インター杯予 1	4	144	0	92	30	19	6
11、19	法政二	〃 2	3	147	0	92	31	19	6
11、20	茅ヶ崎	同準決勝	3	150	2	94	32	19	6
30、11、23	関東	インタ杯決勝	1	151	3	97	32	20	6
2不明	茅ヶ崎	新人戦 1	2	153	1	98	33	20	6
〃	湘南	〃 2	0	153	2	100	33	21	6
31、3、22	湘南キッカーズ	練習	5	158	1	101	34	21	6
4、22	茅ヶ崎	リーグ戦 1	5	163	2	103	35	21	6
4、28	鎌倉学園	練習	3	166	1	104	36	21	6
5、13	商工	リーグ戦 2	不戦	166	不戦	104	37	21	6
5、13	川崎高	練習	5	171	0	104	38	21	6
5、20	藤沢	リーグ戦 3	5	176	0	104	39	21	6
5、27	工業高	〃 4	0	176	0	104	39	21	7
6、2	希望ヶ丘	〃 5	2	178	3	107	39	22	7
6、9	関東	〃 6	3	181	1	108	40	22	7
7、14	商工	東日本予選 1	1	182	0	108	41	22	7
7、15	神工	〃 2	2	184	1	109	42	22	7
7、31	—	東日本大会 1	不戦	184	不戦	109	43	22	7
8、1	藤岡（群馬）	〃 2	3	187	1	110	44	22	7
8、2	大泉（東京）	〃 3	2	189	1	111	45	22	7
8、3	浜松西（静岡）	同大会準々決	2	191	1	112	46	22	7
8、4	遠野（岩手）	〃 準決	1 ペナルティ	192	1 ペナルティ	113	46	23	7
8、5	教大附（東京）	〃 三位決定	0	192	3	116	46	24	7
9、23	暁星	定期戦	2	194	2	118	46	24	8
〃	〃	〃	3	197	1	119	47	24	8
10、27	セントジョセフ	親善	5	202	2	121	48	24	8

11.18	翠嵐	イツタ杯県予選	1	4	206	0	121	49	24	8
11.23	小田原	同	2	4	210	3	124	50	24	8
11.24	茅ヶ崎	同準決勝		3	213	0	124	51	24	8
11.25	希望ヶ丘	同決勝		6	219	3	127	52	24	8
12.2	甲府商(山梨)	同西関東決定		6	225	2	129	53	24	8
32、1.2	——	全国高校	1	不せん	225	不せん	129	54	24	8
1.3	上野商(三重)	全国大会	2	1	226	5	134	54	25	8
1.5	六甲学(神戸)	親善		4	230	1	135	55	25	8
1.26	鎌倉	練習		7	237	0	135	56	25	8

高等学校各年度合計

年度	試合数	勝	敗	引	得点	一試合平均	失点	一試合平均	勝率
26	1	0	1	0	0	0	11	11	0.000
27	9	2	6	1	7	0.877	20	2.222	0.222
28	15	8	5	2	42	2.8	18	1.3	0.533
29	19	14	4	1	65	3.4	23	1.2	0.721
30	16	9	5	2	39	2.4	28	1.75	0.562
31	29	23	4	2	84	2.98	35	1.2	0.793
	89	56	25	8	235	2.6	135	1.5	0.629

中学校

昭和28年

3勝 2負 5引分 合計得点 14 失点 9

湘南地区大会 第三位

昭和29年

9勝 2負 1引分 合計得点 41 失点 5

夏季神奈川県大会 第二位

昭和30年

11勝 2負 1引分 合計得点 36 失点 11

夏季神奈川県大会 第二位

湘南地区大会 第一位

冬季神奈川県大会 第一位

昭和31年度　全成績表

中学・高校

高等学校

試合数	年	月	日	相手校	試合名	得点	失点	勝負
1	31、	3.	22	湘南キッカーズ	練習試合	5	1	○
2		4.	22	茅ヶ崎高	二部リーグ戦1	5	2	○
3		4.	28	鎌倉学園	練習試合	3	1	○
4		5.	13	商工	二部リーグ戦2	不戦勝		○
5		5.	13	川崎高	練習試合	5	0	○
6		5.	20	藤沢高	二部リーグ戦3	5	0	○
7		5.	27	工業高	〃 4	0	0	△
8		6、	2	希望丘高	〃 5	2	3	●
9		6、	9	関東学院	〃 6	3	1	○
10		7.	14	商工	東日本大会予選1	1	0	○
11		7.	15	神工	〃 2	2	1	○
12		7.	31	――	東日本大会一回戦	不戦勝		○
13		8	1	藤岡（群馬）	〃 二回戦	3	1	○
14		8	2	大泉高（東京）	〃 三回戦	2	1	○
15		8	3	浜松西（静岡）	〃 四回戦	2	1	○
16		8	4	遠野高（岩手）	〃 準決勝	1	1	抽選●
17		8、	5	教大附（東京）	〃三位決定戦	3	0	●
18		9.	23	暁星（東京）	定期戦（沖三回）	2	2	△
19		9.	23	暁星（東京）	〃	3	1	○
20		10.	27	セントジョセフ	親善試合	5	2	○
21		11、	18	翠嵐	全国大会県予選1	4	0	○
22		11、	23	小田原	〃 2	4	3	○
23		11、	24	茅ヶ崎	〃 準決勝	3	0	○
24		11、	25	希望ヶ丘	〃 決勝	6	3	○
25		12、	2	甲府商（山梨）	西関東代表決定戦	6	2	○
26		1、	2	――	全国大会一回戦	不戦勝		○
27		1、	3	上野商（三重）	〃 二回戦	1	5	●
28		1、	5	六甲学院（兵庫）	親善試合	4	1	○
29		1、	26	鎌倉学園	〃	4	0	○
30		2、	2	湘南高	新人戦一回戦	3	2	○
31		2、	3	茅ヶ崎高	〃 二回戦	4	1	○

二部リーグ戦二位

東日本選手権大会四位

全日本神奈川県予選 優勝

同　関東予選 優勝

全国高校サッカー選手権大会に出場

新人戦　　第　位

中学校

試合数	年	月日	相手校	試合名	得点	失点	勝敗
1	31、	6.18	末吉中	夏季大会1	2	0	○
2		6.24	白山中	〃 2	3	1	○
3		6.24	六角橋中	〃 決勝	3	0	○
4		6、	湘南高	練習試合	2	2	△
5		7.28	鎌倉学園	〃	3	1	○
6		10.20	藤沢一中	湘南地区リーグ戦	4	1	○
7	●	10.27	セントジョセフ	練習試合	1	0	○
8		11、3	片瀬中	湘南地区リーグ戦	4	0	○
9		11.17	三崎中	〃	4	0	○
10		不明	鎌倉学園	〃	不戦勝		○
11	32、	2、3	――	冬季県大会1回戦	〃		○
12		〃	千代中	〃 準決勝	0	0	抽選○
13		〃	白山中	〃 決勝	不戦負		●

前年度に続いて19連勝記録

夏季神奈川県大会　優勝

冬季湘南地区リーグ戦　優勝

冬季神奈川県大会　二位

31年度

主な行事

◇高校二部リーグ戦
四月二十二日から六月九日まで
五勝一敗一引分　第二位

◇創立記念日OB歓迎試合、及び茶話会
六月十七日（日）十時より、

◇中学校夏季県下大会
六月十八日から六月二十四日、
末吉、白山、六角橋中を連破して優勝す。

◇高校東日本大会予選
七月十四、十五両日

◇夏季合宿
七月二十三日より同二十七日まで、

◇第五回東日本大会参加
七月三十一日より八月五日まで、準決勝で惜しくも抽選負け、第四位となる

◇対暁星第四回定期戦
九月二十三日、於本校

◇中学校冬季湘南地区リーグ戦
十月二十日より十一月十七日まで、
四勝零敗完全優勝す。

◇高校全日本大会県予選
十一月十八日より同二十五日まで、
翠嵐、小田原、茅ヶ崎、希望ヶ丘を連破し優勝。

◇全日本西関東代表決定戦
十二月二日　於県営
六対二で快勝、代表に決定す。

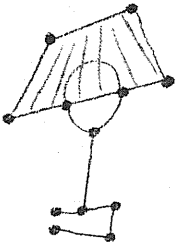
◇クリスマスOB歓迎会
十二月二十二日（土）

◇全国高校サッカー選手権大会
一月二日より一月六日まで

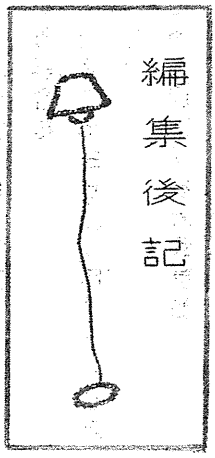
◇六甲学院との交歓会
一月五日　於六甲学院

◇新人戦
二月二日より二月十日まで

◇中学校冬季県大会
二月三日　於県営　第二位



編集後記



◇なにしろはじめてなので全てがわからないことだらけ。創刊のむずかしさというものをつくづく感じた。

◇この第一号の原稿募集に対して自分から書いてもってきてくれた人はほんの二、三人であった。あとはこちらから無理に頼んでやっと書いてもらったのである。

この雑誌は編集係のものではない。皆のものである。この点、忙しい時間をさいて書いて下さった先輩にはほんとうに感謝している。

◇文章の書き方にもっと注意すべきだ。論旨のはっきりした文章を書くということである。中には何をいっているのかさっぱりわからないものもあった。又これとともに原稿用紙の正しい使い方を知ってほしい。これらのことは編集係が書きかえるのにずい分苦労した。

◇この第一号の編集にあたって得た貴重な経験と、この第一号に寄せられるであろう多くの批判をもとにして、あすからでも第二号の準備にとりかかろうと思っている。

「ダッシュ」第一号

昭和三十二年二月二十日印刷
昭和三十二年三月　一日発行
発行所　栄光学園蹴球部
編集責任者　奥田斐規
印刷所　横浜市金沢区泥亀町一〜二五七　光有社

非売品

編集長　奥田斐規
編集委員　生駒直樹
東郷武
伊藤俊彦
小川弘
栗田秀樹
佐々木民雄
金沢洋
篠塚俊夫